高山市埋蔵文化財調査報告書第７号

善応寺遺跡

善応寺遺跡発掘調査報告書

１９８４

高山市教育委員会

序

弥生～奈良時代の土器，石器散布地として岐阜県遺跡台帳に記載されている善応寺遺跡を含む地区で，市道西之一色善応寺線建設が計画された。そのため，遺跡の滅失が懸念される状況となり，工事に先立ち緊急発掘調査を実施することになった。

調査にあたって，岐阜県教育委員会文化課，高山市文化財審議会委員大野政雄氏，日本考古学協会員大江命氏の指導，協力をいただき，古代史の解明に多くの貴重な資料を得ることができた。

報告書刊行にあたり，土地所有者をはじめ，埋蔵文化財の記録保存に熱意をもってあたられた諸氏に深く感謝の意を表するとともに，本書が地方史研究の資料となり，文化財保護の一助になると確信するものである。

高山市長　平　田　吉　郎

本 文 目 次

序
例 言
第1章 遺跡の歴史的環境と地形…… 1
第1節 遺跡の位置と地形…… 1
第2節 善応寺遺跡及びその周辺の歴史的環境…… 3
第3節 善応寺遺跡の地形と土層…… 8

第2章 発掘調査の結果…… 10

第3章 遺構と遺物…… 11
第1節 遺 構…… 12
第2節 発掘調査区域付近の表面採集遺物…… 15
第3節 発掘調査による出土遺物…… 17
第4節 付・西之一色一号墳実測調査…… 19
第5節 須恵器一覧表…… 23
遺物実測図，拓影図（第2～4節記載のもの）…… 26

第4章 総 括…… 31

挿 図 目 次

挿図1．遺跡の位置と周辺位置…… 1
2．西之一色町３丁目の字絵図…… 2
3．昭和36年の遺跡周辺地形図…… 3
4．福田夕咲の巨石群スケッチ…… 6
5．Ｂ６グリッド柱状図…… 9
6．善応寺遺跡A_1～A_3，B_1～B_3地点西之一色一号墳位置図…… 11
7．調査区域グリッド配置図(字善応寺地内)…… 12
8．掘立柱遺構図（ＳＢＯ１）実測図…… 13
9．土層断面図…… 15
10．寛永通宝…… 18
11．西之一色一号墳全体実測図(字ヒタケ洞地内）…… 20
12．西之一色一号墳断面図…… 20
13．西之一色一号墳実測図…… 21
14．西之一色一号墳出土鉄製品，小玉，須恵器…… 22
15．表面採集遺物（石器）…… 26
16．表面採集遺物（石器）発掘による遺物（石器）…… 27
17．発掘による遺物（石器）…… 28
18．縄 文 土 器…… 29
19．歴史時代の遺物（須恵器）…… 30

図 版 目 次

図版 1．近年移動された巨石

2．岩屋前古墳

3．遺跡全景，発掘前の状況

4．A_2，B_1地点発掘作業状況，A_2地点掘立柱遺構

5．周辺遺跡西之一色一号墳

6．表面採集遺物(石器)（挿図15）

7．表面採集遺物，発掘による遺物(挿図16,17)

8．縄文土器（挿図18）

9．歴史時代の遺物(表面採集，出土遺物)（挿図19）

10．西之一色一号墳出土遺物(挿図19)

例　　言

1．本書は，昭和58年６月17日から８月９日まで発掘調査を実施した，岐阜県高山市西之一色町字善応寺地内の善応寺遺跡発掘調査報告書である。

2．市道西之一色善応寺線建設事業により，本遺跡が破壊されるため発掘調査を実施したものである。本遺跡発掘調査は，文化庁補助金（国宝重要文化財等保存整備費補助金・昭和58年７月１日付委保第71号）及び岐阜県補助金（岐阜県文化財保護費補助金・昭和58年９月14日付教文第443号）の交付を受けて実施した。

3．調査は下記の調査団によって実施した。

団長	高山市長	平田吉郎	調査員	高山考古学研究会	会員
副団長	高山市教育長	谷脇豊蔵			徳田誠志・住寿美子・岩花秀明
指導	岐阜県教育委員会	文化課			谷畠喜代三・山下美知・桑原弘子
調査担当		田中彰			森前とし子
調査員	日本考古学協会員	大江命	事務局	高山市教育委員会	
	〃	石原哲弥		事務局長	中屋政二
	岐阜県考古学協会員	寺地茂雄		社会教育課長	川上浩平
	〃	藤本健三		文化財係長	小林浩
	〃	吉朝則富		事務職員	柿下奈緒美

4．本編の執筆は，大江命，石原哲弥，吉朝則富，徳田誠志が行った。

5．本編の挿図作成，図版の写真撮影は吉朝則富，岩花秀明，田中彰が行い，遺物の復元及び実測図の拓影の整理は吉朝則富，住寿美子が行った。

6．調査にあたり，岐阜県教育委員会文化課波多野寿勝氏のご指導を得た。

7．調査にあたって，鴻巣圭三氏に遺物の提供等格別なるご協力をいただいた。

8．調査には，下記のかたがたのご理解とご協力をいただいた。

（土地所有者）砂田久平，小林仁平，稲垣敏男，井之口泰三，佐々木政夫の各位。

（調査協力者）井之口泰三，中嶋知之，山腰哲也の各位。

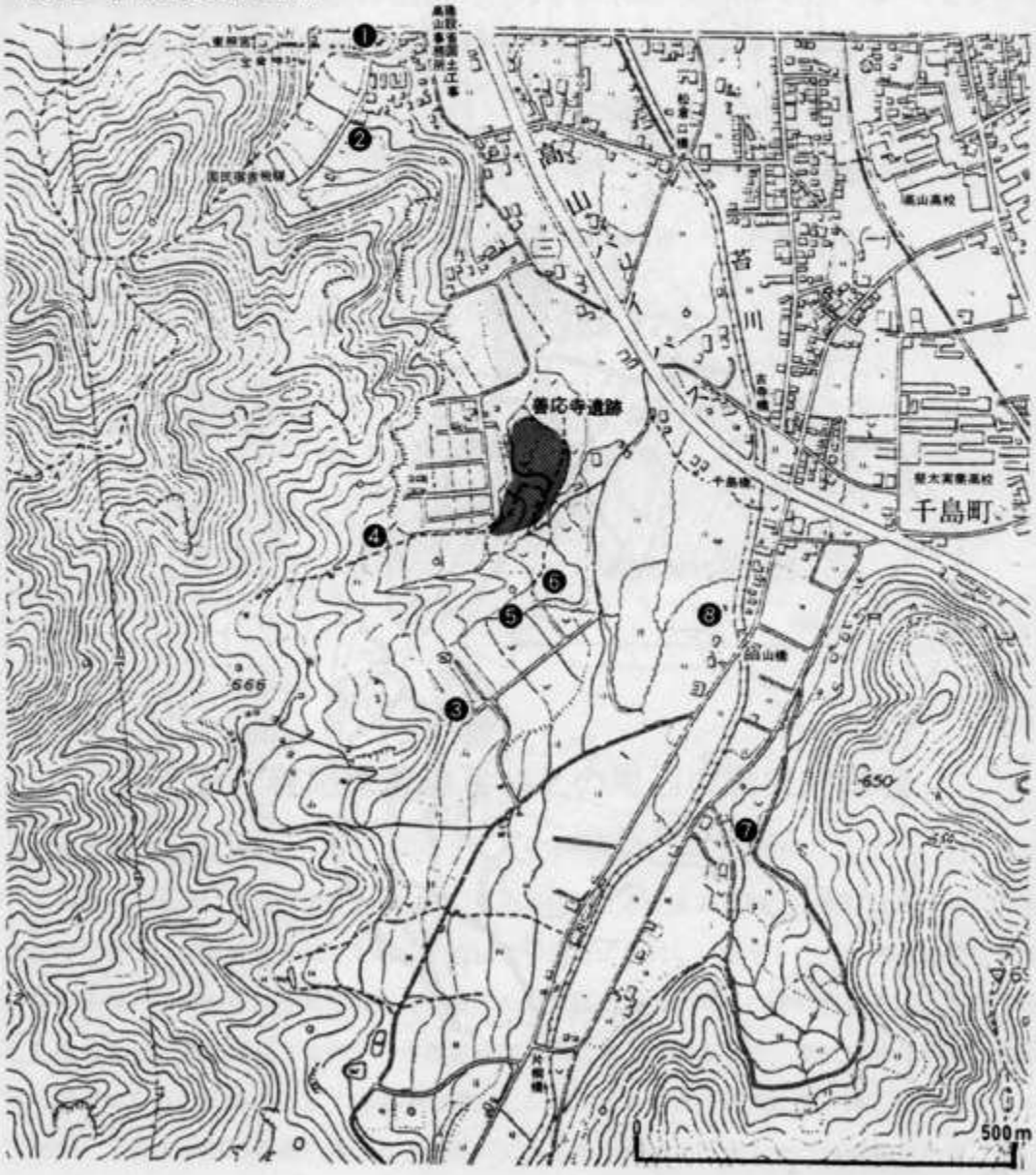
9．方位は磁北とした。

第１章　遺跡の歴史的環境と地形

第１節　善応寺遺跡の位置と地形

本遺跡は高山市西之一色町３丁目1774～1823番地小字善応寺に所在する。高山市街の南西部で松倉山の東山麓に発達する崖錐地形の末端部に位置している。

挿図１　遺跡の位置と周辺遺跡

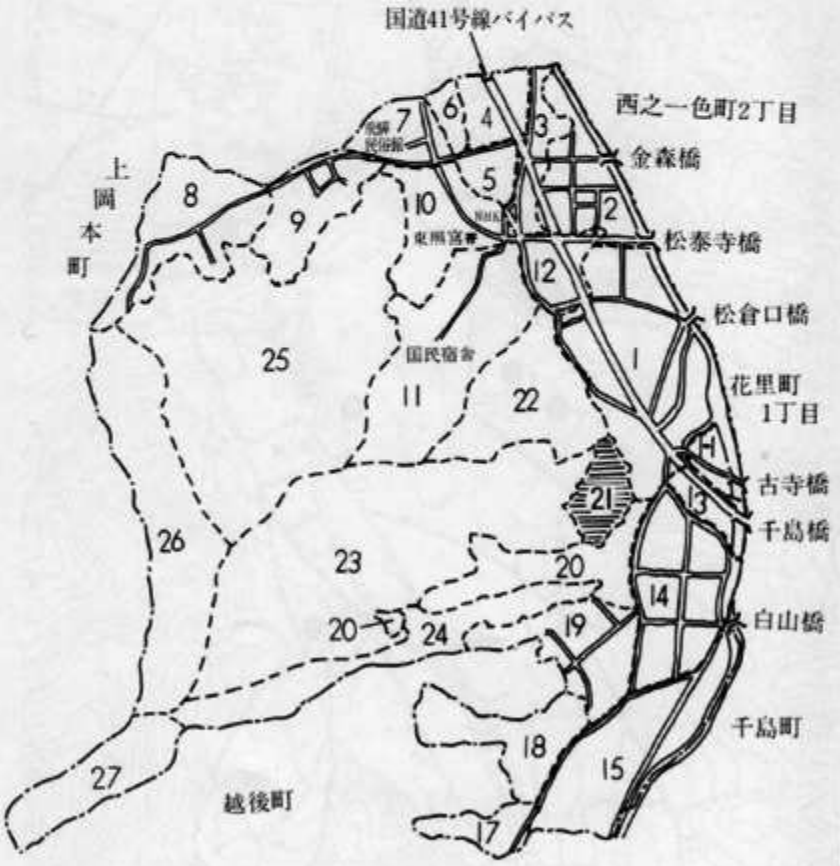


松倉谷川と越後谷川が合流して苔川となり，高山盆地に流れ出るあたりに国道41号線の千島橋がある。その西方約300ｍの北に低くなる台地一帯が善応寺遺跡である。

松倉山の東山麓には，北から東照宮のある鴻之巣，南へ山王洞，八幡洞，ヒタケ洞，善応寺，廻り洞，芦洞，長尾，岩屋前といくつかの洞が小字になっている（挿図６を参照）。これらの洞の中には海抜650ｍあたりまで階段状の水田が開かれ，所々にため池が作られており，崖錐地形の頂部付近一帯は，広く果樹園となっている。

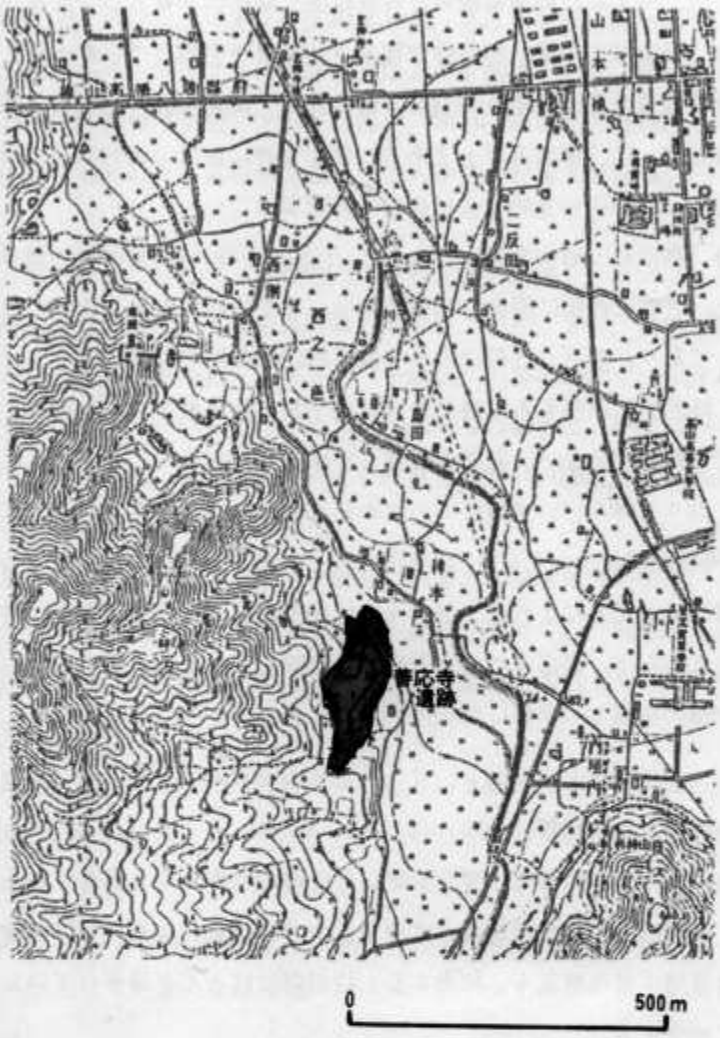
本遺跡の付近には，①鴻之巣遺跡（縄文），②山王洞遺跡（弥生），③岩屋前古墳，④西之一色１号～３号墳，⑤長尾遺跡（縄文），⑥廻り洞（縄文），⑦千島古墳，⑧土塚遺跡（奈良）などの遺跡が分布している。なお，昭和40年初めに着手された宅地造成工事や長尾と岩屋前一帯の圃場整備工事のため，原地形が相当変わっているので参考のため昭和36年測図の地形図を載せた。（挿図３）

挿図２　西之一色町３丁目の字絵図



番号	字名
1	苗代下島里
2	下打東川原
3	ポタ下
4	森ケ坪
5	溝添
6	森下
7	森上
8	山越
9	山洞
10	鴻巣
11	山王洞
12	陣田
13	テントリ
14	土塚
15	道下
17	小砂原
18	岩屋前
19	長尾
20	廻洞
21	善応寺
22	八幡洞
23	ヒタケ洞
24	芦洞
25	蛇ぬけ
26	こなみ
27	名戸洞
1−1	古寺

挿図3　昭和36年の遺跡周辺地形図



第2節　善応寺遺跡及びその周辺の歴史的環境

1．善応寺の地名について

高山市東山地区に曹洞宗善応寺がある。その寺伝によると永禄年間（一説に天正7年）三木自綱が松倉山に松倉城を築城した時，その山麓の西之一色村に一堂宇を建て，如意輪観世音菩薩を守本尊として奉り，真言宗善応寺と号した。天正13年（1585）に金森長近軍によって落城した時焼失し，金森長近は焼跡から本尊を高山城内に移して安置した。慶長14年（1609）に金森可重が父長近の菩提寺として素玄寺を建立し，城内から素玄寺境内に堂を移した。寛永3年（1626）に素玄寺塔頭曹洞宗善応寺となり，天保6年（1835）に現在地に移転建立した。

大正8年に火災で全焼し，同14年に再建され今に至っている。古文書類は火災のため焼失し手掛かりはないが，黒ずんだ如意輪観世音菩薩は現在も秘仏本尊として安置されている。

小字善応寺は，松倉城東山麓に善応寺が建立された場所を指していると考えられる。しかし，富田禮彦著『飛騨後風土記』(明治6年)に，「善応寺跡・清鏡寺跡・鴻巣森にあり，今は松泰寺と成，清鏡寺廃寺跡，山王洞にあり」とある。善応寺跡は西之一色村鴻巣に所在していたことになる。『飛州志』『飛騨国中案内』には善応寺の記載はない。

昭和17年刊の『高山市土地大宝典』によると，小字善応寺の南約300ｍの地点に小字花里善応寺という区画と，さらに西側に隣接して善応寺という小区画がある。この二地区は，地番では小字鴻巣に入っており，西之一色町内の小字長尾地内に飛地となっている。（挿図２参照）。

善応寺という地名が三箇所もあり地形からは小字善応寺が最も有力な場所と推定されるが，地名からだけでは断定できない。花里善応寺と小区画の善応寺の二地点は，土地改良工事で原地形が壊されており寺跡らしい遺構についての話は聞かない。小字善応寺では30年程前に横井戸を掘った時，陶器の皿が出土したり，防空壕を掘った時に五輪塔が出たという。(鴻巣圭三氏談)

前述の『飛騨後風土記』によれば，善応寺跡は鴻巣の東照宮付近となり，善応寺と呼ぶ３地点についての地名からは，善応寺の寺領所在地を意味しているとも考えられるが，推論の手掛かりがない。今回の発掘で，寺跡についての究明も課題の一つであった。

２．「廻り洞」の丘上の巨石群

昭和８年に福田久咲は，飛騨考古学会会報二号に標記の報告文を寄せている。廻り洞の丘上とあるのは，小字善応寺のことである。文中で三つの突端をＡ，Ｂ，Ｃに区分しているが，Ａは岩屋前，Ｂは長尾，Ｃは善応寺に相当する。巨石群はほとんど遺存していないので，原文の一部を引用して紹介する。

「(……前文略……)

ニ，『廻り洞』の段丘

Ｂ突端を越えて最北端にあるＣ地点へ出ると，意外にも丘畑のあちこちに，幾多の巨石が或は立ち或は横たはっているのを見出した。

会報前号所載，江馬修氏の上野の環状列石の研究が，非常に私の考古学的興味を刺激していたし，また神籠石に対する『山城説』『霊域説』の論争，私の記憶にはっきり印されていた故であろう。私はこの『廻り洞』の巨石群を見ると同時に，確かに巨石文化の遺跡であることを直感した。

ざっと目算しただけでも，拾七八個の巨石がこの段丘の上に群立しているのであるから，かなり偉観である。早速その実測に取りかかることとした。

(……略……)

因に，この『廻り洞』の段丘，つまりC突端は南東，東，東北の三面へ扇型に展がっていて乗鞍岳は恰んど正東に当り，アルプスの連峰を見はるかす高台であり。尚ほ，此丘畑の北西部に貯水池がある。むかし洲岬の『文七』という百姓が，独力で築いたと言われているそうで，またこの附近には由緒の知れぬ丸い墓石があるそうである（中井国太郎氏談)。……

(……略……)

この廻り洞段丘の巨石群に対して，直感的に「巨石文化の遺跡」と断定はしたものの，然しいろいろな疑問符を附して静かにこれを再吟味してみた。最初にまづ，自然の現象ではないかという疑問である。此段丘附近から，エチゴ谷（千島区）の奥へかけて，松倉石と言われる庭石の出場所である。（……略……）然しこのC段丘の列石の如きは，到底自然の現象とは思われない。どうしても有意義的，作為的の配列としか見られない。二重に取り巡らされた石籬としか思はれない。

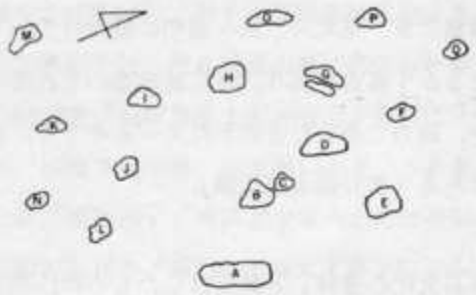
次に古墳の崩壊せしものではないかという疑問である。勿論A地点の古墳，エチゴの古墳と思ひ合せて，誰しもが逢着すべき疑問である。が，巨石を集めて，一旦古墳を築造したものが斯かる広い範囲に散乱すべき理由もなく，わざわざその遺石をあちこちへ配列するような空な努力をなすべき筈もない。

最後に，松倉城主三木氏の家臣の屋敷跡でないかという疑問であるが，巨石の配置がえを裏書きするような状態に置かれていないのみならず，むしろ屋舗を設けるには邪魔になる存在であることは一目瞭然である。(……以下略……)」

福田夕咲は結論として，神籬，磐境としてよりも，石城として，民族の防禦工事として扱うのが適切ではないかとしている。なお，調査の日に石匙一ケ，土器片の表面採集と石鏃の破片の散布を報じている。

残念ながら現在は移動された10数個の巨石が畑の隅に残るだけで，一部庭石に持ち去られたという。引用文献のみが手がかりである。巨石の石質は「松倉石」と呼ばれている濃飛リュウモン岩で，この地域の巨石墳に多く用いられている岩石と同種のものである。今回の調査で須恵器類の出土以外は流出の縄文土器小破片で，石器時代の遺跡中心部は宅地造成地の下部と推定され，松倉城築垣のために古墳群がこわされ，巨大な石のみ取り残されたのでは，という推定もなりたつのである。

挿図4　福田夕咲の巨石群スケッチ



図版 1　近年移動された巨石

3．昭和10年刊の「飛驒石器時代遺跡地名表」　飛驒考古土俗学会編

西之一色　　参考　西之一色　打製石斧（日本遺跡地名表）

- 廻り洞　　弥生式土器，石鏃，石匙，巨石群
- 山王洞　　弥生式土器，石鏃，打製石斧，磨製石斧，石鎌，有孔磨製石鏃

4．岩屋前古墳について

延享2年（1744）長谷川忠崇によって編輯された『飛州志』巻第八の古窟の項で，広瀬窟，高野窟と共に「西一色窟」が記載されている。古墳の項は別記してあり，古窟を古墳とは区別して古代の人々の住居であるという認識であった。しかし横穴式石室の構造を実測し，その築造についての所見が述べられており，飛驒地方の古墳に関する文献の初見である。

図版 2　岩屋前古墳

延享３年，上村木曾右衛門満義著『飛騨国中案内』では，吉城郡広瀬町村の塚屋をとりあげ火の雨の降った時に造ったもの，恙（つゆ）という虫が世に多く出た時の隠家に造ったと相聞くとあり，住居という当時の考え方が伺える。西之一色の塚屋については触れていない。高山地方では，赤保木の三墓山と中切村王塚を古墳としてとりあげている。

安政年間の桐山力所著『飛騨遺乗合符』では，御墓山，冬頭村王塚，桐生村古塚をあげている。『飛州志』の追補としての語載であろう。

明治６年，富田礼彦著『飛騨後風土記』では『飛州志』の記載を否定して，古代の住居ではなく古墳として捉え，古墳の石槨（いしかく）であると断定し，苦川の東側にある千島村の古墳と対比して西の石槨（西之一色）と呼称するようになったと地名考を述べている。古墳の所在地は西之一色村州崎にありとし，挿図の説明では山下字長尾（洲崎ともいう）とある。横穴式石室の大きさは，『飛州志』の実測値と同じである。

佐藤泰郷著『董菜園集巻三』の考證之部で，明治17年に書いた「穴居跡」では富田禮彦が西之一色村の條に飛騨にて塚屋と称するものは，いづれも上古の墳墓にて内の岩構えは石城（石槨）と唱えいるのを否定し，石槨（現在での竪穴式石室）と穴居跡（現在での横穴式石室）を区別して捉え，国府町を中心とした古墳と穴居跡の実測図が添えられている。明治19年に佐藤泰郷と親交のあった神田孝平が来飛し，広瀬鴻峠口古墳の玄室の構造が報告された。（東京人類学会雑誌第３巻20号　明治20年）

こうした経過を経て横穴式石室と竪穴式石室が古墳の一型式と認識されるように至った。その後，昭和初期の大塚行蔵の大八賀村三福寺の古墳発掘研究，立田長太郎の上広瀬町古墳群の分布調査研究，角竹喜登の精力的な飛騨地域の古墳分布調査が進められた。

高山盆地では，川上川北部の赤保木を中心とした一帯と，大八賀川東部の三福寺を中心とした地域と，苦川ぞいの西之一色附近の大きく三つの地域に古墳が分布している。今回の発掘調査で，破壊にひんした西之一色１号墳を精査できたことは，大きな収穫であった。

5．山王洞（さんのうほら）遺跡

加藤輝次によって報告された遺跡である（昭和９年，石冠２の４，ひだびと３の1．２ ）。とくに石鏃の研究から有柄鏃が総個数中三割以上を占める場合，それは単純弥生式遺跡か，若しくは弥生を主勢力とする複合遺跡かである。という仮説を導いている。（石鏃小観２，ひだびと３

の12，ひだびと4の4）また弥生文化の代表遺跡として西之一色字山王洞，西之一色大字善応寺洞と廻り洞があげられている。

山王洞遺跡では石鏃36（内有柄鏃19個 52.77%），磨製石鏃1，磨製石斧1，打製石斧1，石鎌1点，土器片（弥生）43片の採集が報告されている。東照宮の南側の段々畑であるが，現在は宅地に造成されている。

6．土塚遺跡

西之一色町字土塚で，昭和45年に土地改良工事中に奈良時代の瓦が，枚数は少ないが重なるように土中に埋っているのが発見された。少し下流には字古寺という地名や，古寺橋と呼ばれる橋が現存している。出土地点は工事がほぼ終了しており，十分な調査ができない状況であった。出土遺物は高山市郷土館に保管されている。

古墳群のある地域と，古代寺院跡の関係が密接であることから，このあたりに古代寺院があったのではと考えられるが，資料不十分で推測の域を出ないのが残念である。

7．字長尾地内の尖頭器出土地点

昭和50年春，西之一色町の鴻巣圭三氏が工事中にほぼ完形の有舌尖頭器1個を採集した。海抜約610mで，北へ小さな尾根を越すと善応寺遺跡へと続いている。湿田を掘った 約30m²の池からの水の落し口附近で採集されたものである。高山地域では有舌尖頭器の出土地点が明らかな最初の貴重な資料である。

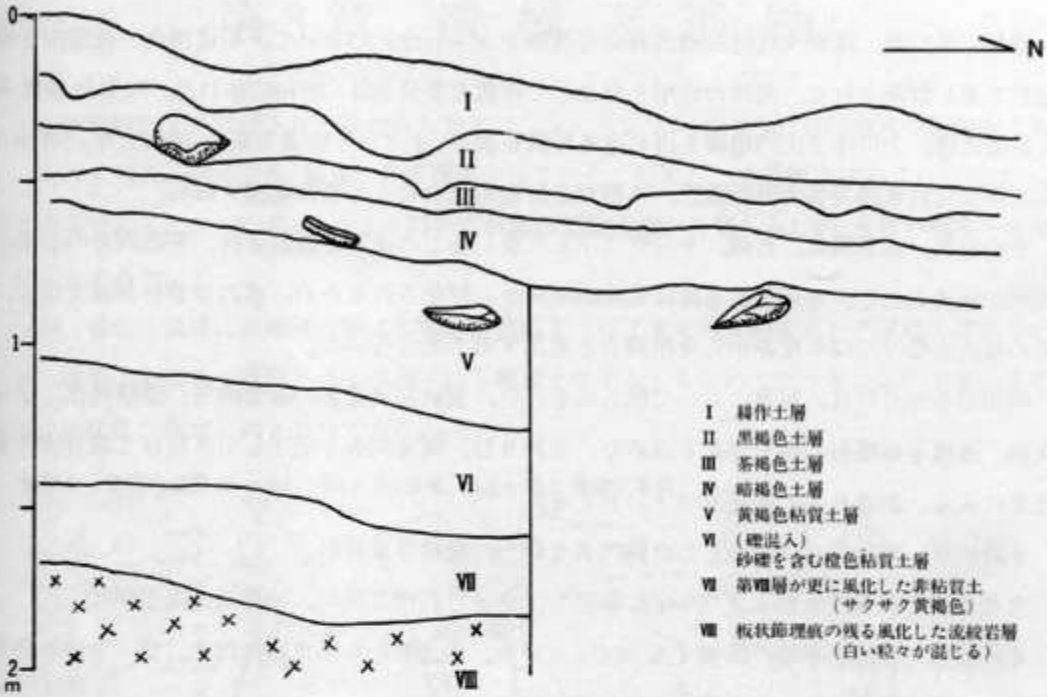
第3節　善応寺遺跡の地形と土層

前述したように，遺跡は山麓の崖錐性地形に立地している。耕土は薄く黄褐色土層となり，その下部はリュウモン岩の角礫層となり，基盤のリュウモン岩体に続いている。とくに，この山麓には松倉谷川上流まで巨レキの多いところである。松倉観音とその裏のカナトコ道，観音下の斜面には特に松倉石が目立って多い。なお，松倉城の石垣も殆んど松倉石によって構築されている。

沖積面から約10mの高台であるが，粘土質火山灰層は認められず，台地の形成も沖積世と推定される。

挿図5に遺跡の地層断面図を示した。今回は道路新設予定地区のみの発掘調査であり，本来の遺跡の中心部は宅地造成地区にあったと推定される。（石原）

挿図5　B6グリッド柱状図



第２章　発掘調査の経過

昭和57年12月，埋蔵文化財包蔵地善応寺遺跡をふくむ地区において，市道西之一色善応寺線建設事業が計画された。遺跡の破壊を懸念した市教育委員会は，昭和57年11月，岐阜県教育委員会文化課，土川修平氏の指導を得て遺跡範囲を調査，土川氏と協議を重ね，昭和57年12月29日高山市文化財審議委員大野政雄氏，市教育委員会の立会のもと遺跡範囲を確認。

その結果，須恵器片，石鏃，チップ（下呂石製）などの遺物が確認され，発掘調査の必要な範囲が定められた。市道建設事業は昭和58年秋から開始されるため，市教育委員会は文化庁，県の補助を受けて58年度春から発掘調査を実施することになった。

昭和58年６月17日，現地において鍬入式を行い，現状写真撮影，表土除去，遺構検出，遺構実測，遺構写真撮影の順で作業を進めた。８月９日，現地調査を完了し引き続いて報告書作成作業に入る。調査日誌の概要を以下に記する。

６月17日　関係者立会いのもとに鍬入式を行う。現状写真撮影。

６月18日　調査区域を４グリッドに設定し，クイ打打作業開始。一部表土除去開始。

６月23日　台地北東端の区域（A_1地点）を検出。表土層から須恵器片出土。ピットが５箇所確認されたが，遺構は検出されなかった。

６月25日　台地南西部（A_3地点）の表土除去開始。

７月１日　A_3地点に黒色土の輪郭を確認。検出作業を開始。黒色土の下層には黄茶褐色土が堆積し，板状節理の礫がＢ６グリッドに見られた。遺物は，表土層に須恵器片出土したが，その下層には何も見られなかった。

７月７日　A_2地点の検出開始。Ｅ－９グリッドの表土層から先土器時代の彫器が出土。その他，縄文土器片，フレーク，チップ等も出土した。

７月14日　同グリッドのあぜを取り去ったところ，掘立柱遺構を確認。実測作業を始める。

７月18日　台地中央部の水田址を調査。水田の痕跡を確認したが，谷状地形の湿地帯となっていて，住居址等は確認されなかった。

７月20日　過去に存在した巨石群調査を開始。巨石は移動されており，動いていないのは１箇所のみであった。その石の状態を調査した結果，自然地形の状態を確認。

７月23日　周辺遺跡B_2，B_3地点の調査を開始。西之一色一号墳の掃除，実測を開始。

８月４日　字廻り洞地区にある畑地（B_1地点）を調査。縄文早期の土器片，下呂石製のコア・スクレパー等が出土した。遺構は確認されず，流れ込みと考えられる。

８月９日　本日をもって現地調査を終了。引き続き，高山市民文化会館で報告書作成に着手。59年２月に校了し，印刷準備に入る。　（田中）

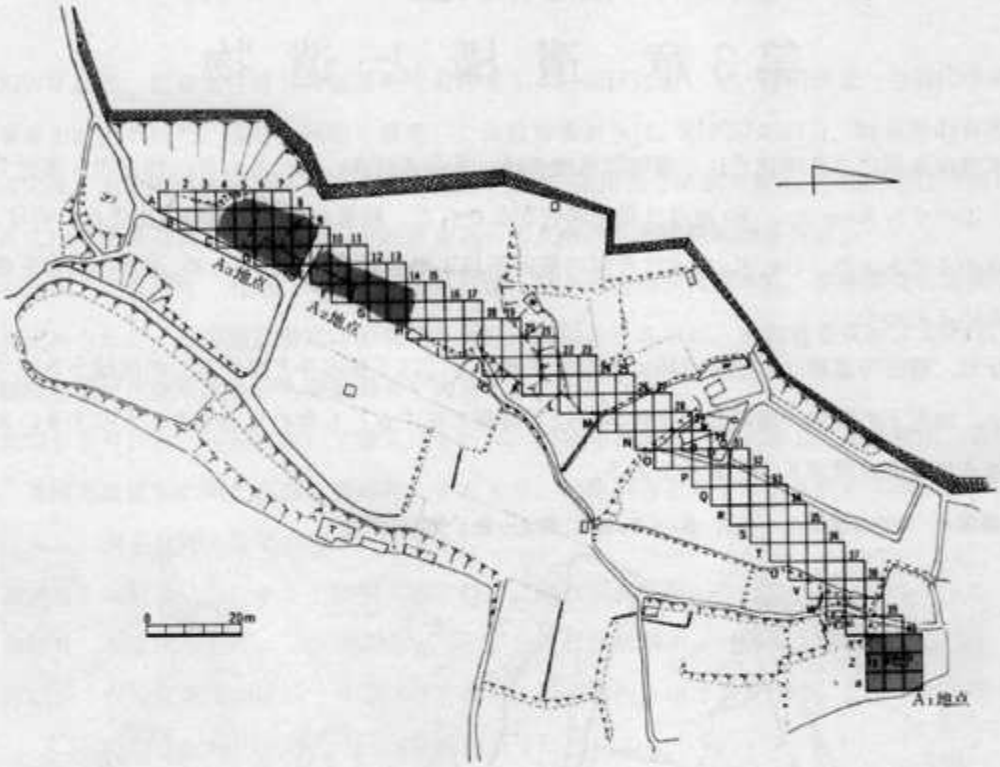
第3章　遺構と遺物

本遺跡発掘により確認された遺物散布地点は，A_1，A_2，A_3，B_1，B_2，B_3，地点の6箇所であり，このうちA_1～A_3，B_1地点は発掘調査がなされた。結果として遺構の検出されたのはA_2地点のみであった。B_2，B_3地点は今回の道路新設工事区域から外れるため，遺物の散布を確認するにとどめた。

なお，善応寺遺跡は県遺跡台帳によると字善応寺（以下善応寺と略する）の区域とされているが，地形上の関係で南隣りの字廻洞（以下廻洞と略する）も含めて述べることにする。また，各地点の位置は挿図6のとおりである。

挿図6　善応寺遺跡A_1－A_3，B_1～B_3地点，西之一色1号墳位置図

挿図7　調査区域グリッド配置図(宇善応寺地内)



第1節　遺　　構

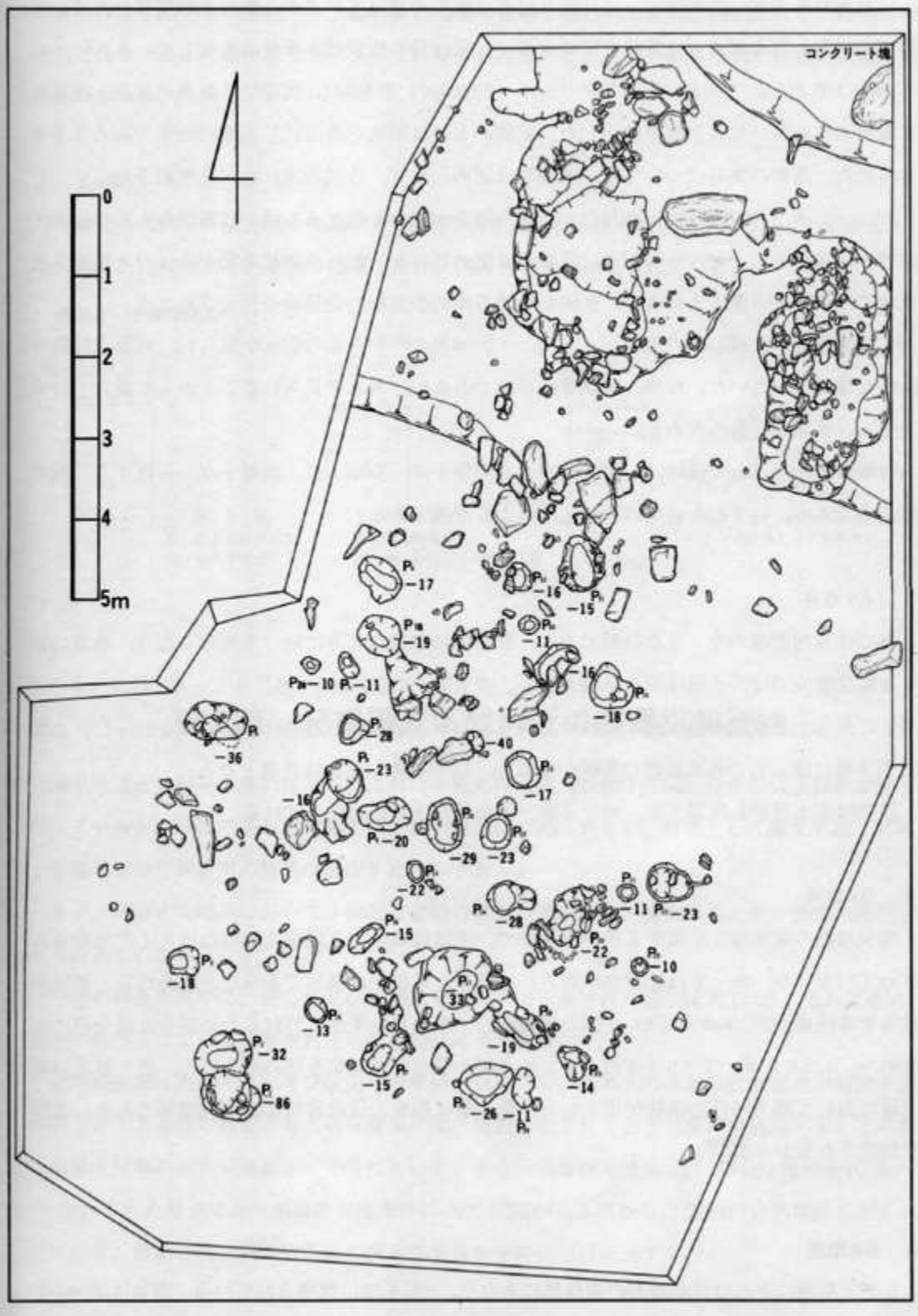
1. 現　況

善応寺地内と南側に隣接する廻洞地内の現況は畑である。松倉山の東側山麓に広がる扇状地にあって，裾部は水田として造成されている。I 18～20，J 19～20グリッド付近に小丘があるが，これは上部にある団地の石垣がくずれた際に，この地点にあった池を埋めて盛土したものである。その盛り上げられた丘から下方（北へ）にかけては，10数年前まで水田が作られていた。A 1 グリッドと α 40グリッドの標高差は17.63 m で約 5 度の緩い傾斜をみせている。

2. A_1 地点

佐々木家所有の墓地上部にあるキンコツ細道から須恵器片が発見されている。人為的に捨てられたものと考えられる。又，その墓地の下は造成された畑で，12 m×12 m の範囲を調査したが，表土層から須恵器が出土したのみで遺構は確認されなかった。ピットが 4 箇所確認されたが，ビニール等の混入もあり後世の所産であると考えられた。

挿図8　掘立柱遺構（SBOI）実測図



3．A_2地点（掘立柱遺構SBOI）　（13頁，挿図8参照）

台地南西部の緩い傾斜地で，これより以北は近年の埋立てにより基盤の土砂で覆われている。黒褐色の薄い表土層の下は黄褐色粘質土層で，流紋岩の板状礫を多量に包含している。

調査は南北5グリッド，東西3グリッド（約240㎡）を発掘し，北部に2箇所の集石，南部に1箇所の集石及びピット群を検出した。北部のものは畑地を水田化した際の所産であろうと考えられた。南部の集石については，人為性は認められず，自然の流れ込みと判断される。

ピットは大小計32箇所検出されたが，うち深さが20cmを超えるものが12箇所ある。ピットの内容土の検討から，ピットの配列に規格性は認め難いが，何らかの建築物があったと推定され，土地の傾斜等を考慮に入れると，長軸が東西方向の長方形の建築物が想定されよう。

P_1は深さ86cm，径75cmの大型ピットで，－50cmあたりから炭の混入が見られ，底部では敷き詰めた様になっていた。性格，時期等は不明であるが，湧水の見られることから貯蔵穴とは考え難く，墓壙の可能性がある。

A_2地点から出土した遺物は，表土層中より彫器1点，石鏃1点，削器1点，石核2点，剥片等12点である。いずれも自然の流れ込みによる所産である。

4．A_3地点

善応寺地内南端のやゝ急な斜面である。黒色土の堆積は北方に向って著しくなり，農道に接する最北部分では，土層は深さ68cmを測る。表土除去の後，A5・6，B5～8，C6～8グリッドに黒色土の堆積が見られその部分を調査したが，遺構及び遺物は確認されなかった。土層は第V層に流紋岩の板状節理の角礫が集石し，以下風化した流紋岩層となる。

遺物は表土層から削器1点，剥片3点，須恵器片3点が出土している。

5．B_1地点

廻洞地内の最南端に位置する狭小な地点で，宅地造成により周辺の地形はほとんど原形をとどめていないが，かっては松倉山から舌状に延びた尾根上の鞍部であったと思われる。遺物が散布する区域が約200㎡あるが，今回の道路新設工事からわずかに外れるため調査は最少限にとどめた。1.2×8m，1×6.5mのトレンチ2本を設定して発掘を進めたところ，表土層及び第2層において縄文時代の遺物が出土した。第3層は基盤の流紋岩体に続く角礫層である。遺構は検出されなかった。

6．B_2地点

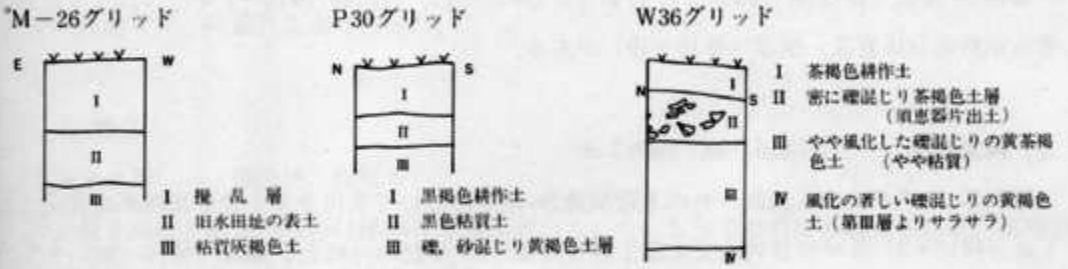
Bから東南に下った舌状地形の突端部にあたり，一部墓地に使用されている。遺物は200㎡の

せまい範囲に集中して表面採集され，遺構の存在した可能性がある。畑地となっている部分は深さ１ｍほど削平されており，上部の墓地端部に遺構と思われる断面が観察される。遺物は鴻巣圭三氏及び高山考古学研究会によって採集されたものと，今回の調査期間中に表面採集されたものがある。

７．Ｂ₃地点

Ｂ₂地点の北に５ｍほど低い畑地がＢ₃地点である。舌状丘陵と丘陵の間にはさまれた部分で，東へ緩やかに傾斜する。遺物は縄文土器片，削器等が表面採集されている。

挿図９　土層断面図



第２節　発掘調査区域付近の表面採集遺物

岐阜県遺跡台帳（昭和51年３月）における善応寺遺跡（Ｇ12Ｔ00549）は弥生式土器散布地となっているが，今回の調査では弥生式土器の存在は認められない。結果として縄文早期・前期・中期及び須恵器使用の時代が把握されたのである。

また，隣接する廻洞において３箇所に遺物の散布が認められ，縄文早期と中～後期の遺物と思われるものがある。

今回の調査期間中に，善応寺及び廻洞散布地で表面採集された遺物は約390点。それ以前に，地元の耕作者によって採集されていた遺物は22点である。

資料提供者は鴻巣圭三氏及び高山考古学研究会である。鴻巣氏の採集品には地点の混同するものも若干ある様である。考古研採集品は既に報告がなされており（飛騨春秋24－３）この際に鴻巣氏採集の有舌尖頭器が紹介されている。有舌尖頭器採集地点は，廻洞Ｂ₂地点から南へ約100ｍずれた地点であり遺跡の立地条件にやや問題がある点から，遺物の自然移動も考えられている。善応寺及び廻洞散布地の表面採集遺物を時代別に記述する。

1．縄文草創期　（挿図15－1，図版６）

有舌尖頭器１点で，廻洞地内での単独出土である。既に詳細な報告がなされているが（飛騨春秋24－3，昭和54年）現長7.1cm，最大幅3.0cm，下呂石製で 柳又型尖頭器に属するものである。原包含層の不明である点が惜しまれる。

2．縄文早期　（挿図15，16，18，図版6～8）

善応寺Ｇグリッド付近に山形押型文土器（挿18－1）が1点表面採集された。わずかに黒鉛を含んで鉛色を呈し，厚さ５㎜，斜位もしくは縦位の帯状施文である。これに伴うものとして鍬型鏃が２点（挿15－2.3）チャート製の削器類（挿15－4～6）がある。

廻洞B_2地点では石鏃（挿16－2），打製石斧（挿16－1），尖頭器（挿16－3.4），（以上４点高山考古学研究会採集品）削器（挿16－19）がある。

3．縄文前期　（挿図16，18，図版7.8）

廻洞B_2地点の北方，比高５ｍの下段畑地B_3地点において雲母を多く含む諸磯系沈線文土器１点（挿18－2）及び竹管列点文土器１点（挿18－3）が認められた。削器（挿16－20）も１点ある。

4．縄文中期　（挿図15，16，18，図版6～8）

善応寺A_2地点の東方地区に集中して遺物の散布がみられる。土器は縄文のみの破片であるが，中期前葉土器（挿18－4）である。打製石斧（挿15－22.23），石鏃（挿15－7～16），削器（挿15－17～19），抉入掻器（挿15－20），石核（挿15－21）などがこの時期に属するものと思われる。

廻り洞B_2地点においては土器は未確認ではあるが多数の有茎石鏃が採取されており（挿16－9～16）縄文中期～後期にかけての所産ではないかと考えられる。なお（挿16－9）は先端部にタール状のこびりつきが見られる。

5．須恵器　（挿図19－1～10，図版９）

善応寺地内のほぼ全域にわたって散布が認められる。居住による，また生産による，あるいは古墳の破壊によるのかは不明であるが，極端に細片になったものと，器形の知られる資料とが認められる。坏，甕が大部分である。廻洞B_3地点の下方地点においても，８世紀頃の坏身の好資料が採取されている。

6．その他

施釉陶器片，不明鉄片及びガラス製品の破片等があるが，所属する時期等不明である。

第3節　発掘調査による出土遺物

発掘調査が行われた区域のうち，遺物が出土したA_1～A_3，B_1地点について個々に遺物の解説を試みたい。

1．A_1地点　（挿図19－11～15，図版9）

遺物は全て表土層中に含まれるもので，須恵器27点，施釉陶器3点，近世磁器3点，素焼蔵骨器1個体十数片，鉄片（釘？）1点である。須恵器の内訳は，甕胴部16，壺口縁部1，頸部片1，坏身片4，坏蓋片5点であった。

2．A_2地点

(1)縄文土器　（挿図18，図版8）

表土層下部より縄文のみの口縁部片1点(5)が出土した。LRで口唇にも施文される。黄褐色で焼成は堅いが，砂・小石を多く含む粗製の土器である。

第II層から計23点の土器片が出土し，以下の様に分類される。

〈1類〉 6～11は口縁と胴部に2条の半隆起帯をもち，下半部は無文であるが上半部は縄文で埋められる。半隆起帯の下には三角陰刻，あるいは交互刺突による波状文が施される。口唇は平担で胴部はくびれをみせる。色調は赤褐色で石英砂を混じえ，焼成は良い。12片とも同一個体であろう。

〈2類〉 縄文が主体に施されるもので，13はLRの縄文地に半截竹管の沈線が弧状に描かれる。円筒形深鉢の底部近くの個体である。黄褐色，厚さ11㎜，焼成良好。表土層出土の5も同類に含まれる。12はRLの縄文地に縦位の点列を伴う。黄褐色，厚さ5㎜，焼成普通。

〈3類〉 14は赤褐色の粗質土器に縦位の沈線が施されるもので，底部近くの個体である。厚さ8㎜，砂粒を含み焼成普通。

〈4類〉 無文土器で15は底部である。赤褐色・黄褐色を呈し，いずれも粗製で砂粒を多く含み，焼成はやや悪い。

(2) 石　器　（挿図16－21～24，図版7）

表土層内（－18㎝）において，彫器1点が出土した。図の如く小角礫に縦位の長い剥離面2枚をもち，同方向に小さな彫刻刀面を計4本作出している多面体彫器である。石材は透明良質

の黒曜石を使用しており，善応寺遺跡では最も古い様相をもつ遺物である。(21)

石鏃1点(22)も表土層出土で，段を有する長身凹基鏃（下呂石製）である。

削器は第Ⅱ層より小形の頁岩製が1点出土した(23)。その他，表土層から剥片6点，石核2点，第Ⅱ層から削片2点，ピット内から剥片(24)・削片各2点（いずれも下呂石製）が出土している。

(3) 須恵器，その他

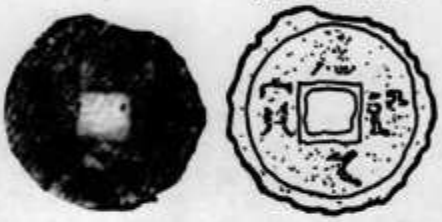
いずれも表土層中より，土師器？片1，須恵器甕頸部破片（叩目）1，及び施釉陶器1片が出土している。

3．A_3地点　（挿図17－1～3，図版7）

下呂石製削器1点(1)及び剥片2点（2.3）が表土層から出土している。

須恵器は坏身破片2，坏蓋破片1，その他施釉陶器1片，古銭（寛永通寶鉄銭）1，窯の滓片1，瑠璃色ガラス片1点が検出された。

挿図10
寛永通宝（拓影）



4．B_1地点

(1)縄文土器　（挿図18－16～23．図版8）

第2層から計30片の土器が出土した。内容は次のとおりである。

格子目押型文土器(16)：摩耗度が強く明瞭ではないが5㎜角の平行四辺形の格子目が施される。赤褐色，厚さ5㎜，焼成普通。口唇に斜めの刻目が入る。1点のみである。

繊維入無文土器(17)：1点のみで赤褐色，厚さ9㎜，小石を含み焼成普通。

縄文のみの土器（18～23）：明褐色，厚さ7㎜焼成堅緻のＲＬ縄文が2点（18・19）A_2における2類土器と同類であるいは同一個体かと思われる。黄褐色，厚さ5㎜焼成普通のもの4点（20～23，ＲＬ2，ＬＲ2）その他無文もしくは文様不明の小片22点がある。より糸圧痕文と思われるものも1点見られる。

(2) 石　器　（挿図17－4～13，図版7）

表土層・第Ⅱ層より出土した石器は，石鏃1，スリ石3，削器1，掻器4，剥片2，削片17点である。石鏃(6)は三角鏃で下呂石製。スリ石（11.12.13）は流紋岩製でいずれも円形に近いものの破片である。ススの付着のみられるものも1点ある(13)。削器(10)は砂岩製の粗雑なもの1点。掻器は黒曜石製2点（4.5），下呂石製2点（8.9）である。特に4は全周の3分の2に厚みのある刃部を作出した拇指型掻器である。剥片は下呂石・玉髄製各1点で，7は調整剥片である。削片はチャート1，頁岩製各1点で，それ以外の15点は全て下呂石製である。

（吉朝）

第4節　付・西之一色一号墳実測調査

1．墳　丘

西之一色1号墳は，松倉山の東方山麓斜面に構築された古墳である。盗掘あるいは近年の道路工事などにより，墳丘のほとんどが削平され，横穴式石室が天井部を欠いた状態で露出している。清掃前の石室内には，土砂と共に多量の流紋岩の割り石が流れ込んでおり，墳丘における葺石の存在が推察される。

墳丘の規模，形状については不明であるが，玄室を中心とする直径約14mの範囲に，僅かに墳丘の痕跡が観察され，この範囲に盛土されていたものと思われる。今回は実測調査を実施したものであり，墳丘，外部施設あるいは石室の構築状況などについての詳細は明らかでない。

2．埋葬施設

ほぼ南方へ開口する両袖式の横穴式石室で，主軸はN－28°－Wを示す。残存する石室の平面規模は全長7.52m，玄室長2.95m，玄室幅1.94m(中央部)，羨道長4.57m，羨道幅約1.3m，袖部幅0.9mを測る。玄室はほぼ長方形を呈している。石室の各面の形状について述べる。

(1) 奥　壁

奥壁には1.8m（露出部の長さ）×0.85mの石1枚を横位に据えて基底石とし，その上に幅2.52×高さ0.62mの石が横位に，左右の側壁に乗せかける形に積まれている。一段目と二段目の間隙は割り石で充塡されている。尚，2段目の石は基底石より約10cm玄室中央に張り出している。

(2) 右 側 壁

奥壁より数えて第1石目に，幅2.59m×高さ0.45m（最大高）の石を横位に据えて基底石とし，さらにその上に幅2.55m×高さ0.63mの石が積まれ壁面の高さは1.1mを測る。第2石目は幅0.3m，高さ（露出部）1.08mの石が縦位に据えられて，第1石目とほぼ高さが揃えられている。

(3) 左 側 壁

第1石目には幅2.07m×高さ1.1mの石が横位に据えられ，これ1つで右側面の二段に積まれた石に匹敵している。第2石目は幅0.7m，高さ0.9mの石が，縦位に据えられている。第1石目は剥離が激しく，構築時にはもう少し玄室内へ張り出していたものと思われる。これらの石は床面に対しほぼ垂直に据えられている。また，左側壁上部に見られる石は，ひかえ積みの石と思われる。

(4) 袖　石

1.3m(露出部) ×0.3mの石が，又左袖石には1.35m(露出部)×0.5mの石が縦位に置かれる。

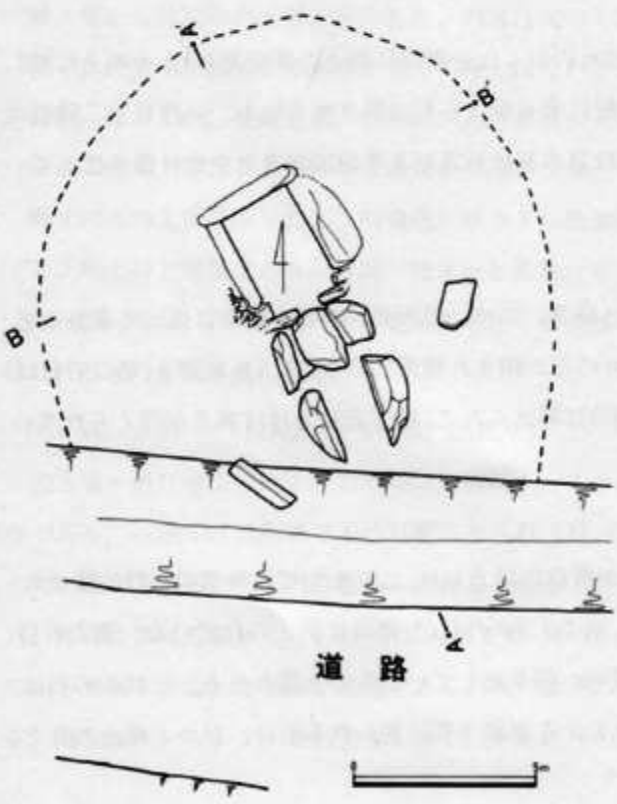
(5) 羨道部

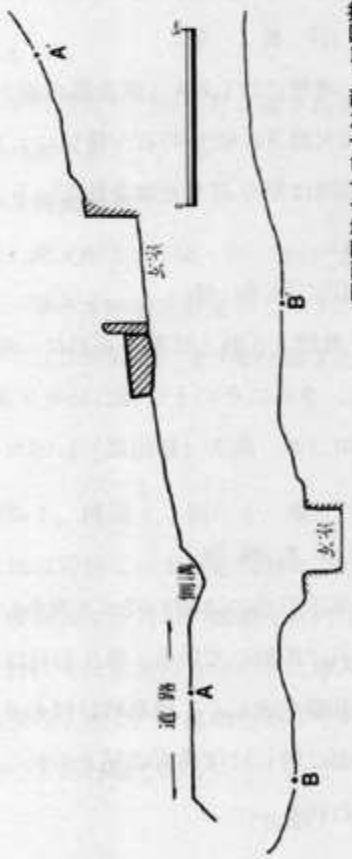
高さ1.3m～1m，長さ1.5m～2.3mの石が，左右それぞれに 2個づつ置かれているが，原位置を留めているのは右羨道部の第1石目の石のみである。殊に，左羨道部の第1石目の石は何かの作用によって2つに割れ，その半分が羨道部を埋めている。又右羨道部の第2石目の石は，抜き取られて道路脇の側溝付近にあったものを，今の位置に戻したものである。又，羨道より東へ2.5mの地点にある石は 清掃前には半分土砂に埋まって玄室中央にあったもので，おそらく天井部に用いられていたものであろう。石室に使われている石材は，通称松倉石（流紋岩）である。

(6) 床　面

奥壁から中央にかけての部分と左右側壁の一部に敷石が確認されたが，構築時にはおそらく一面に敷石が施されていたと推定される。また，玄室中央付近には60cm×50cmの範囲に炭が残り，焼痕のある石も認められた。後世の所業と思われる。玄室内の床面は僅かな傾斜が認められるものの，ほぼ水平に整備されているが羨道部に於いては，約10°の緩やかな傾斜がみられる。

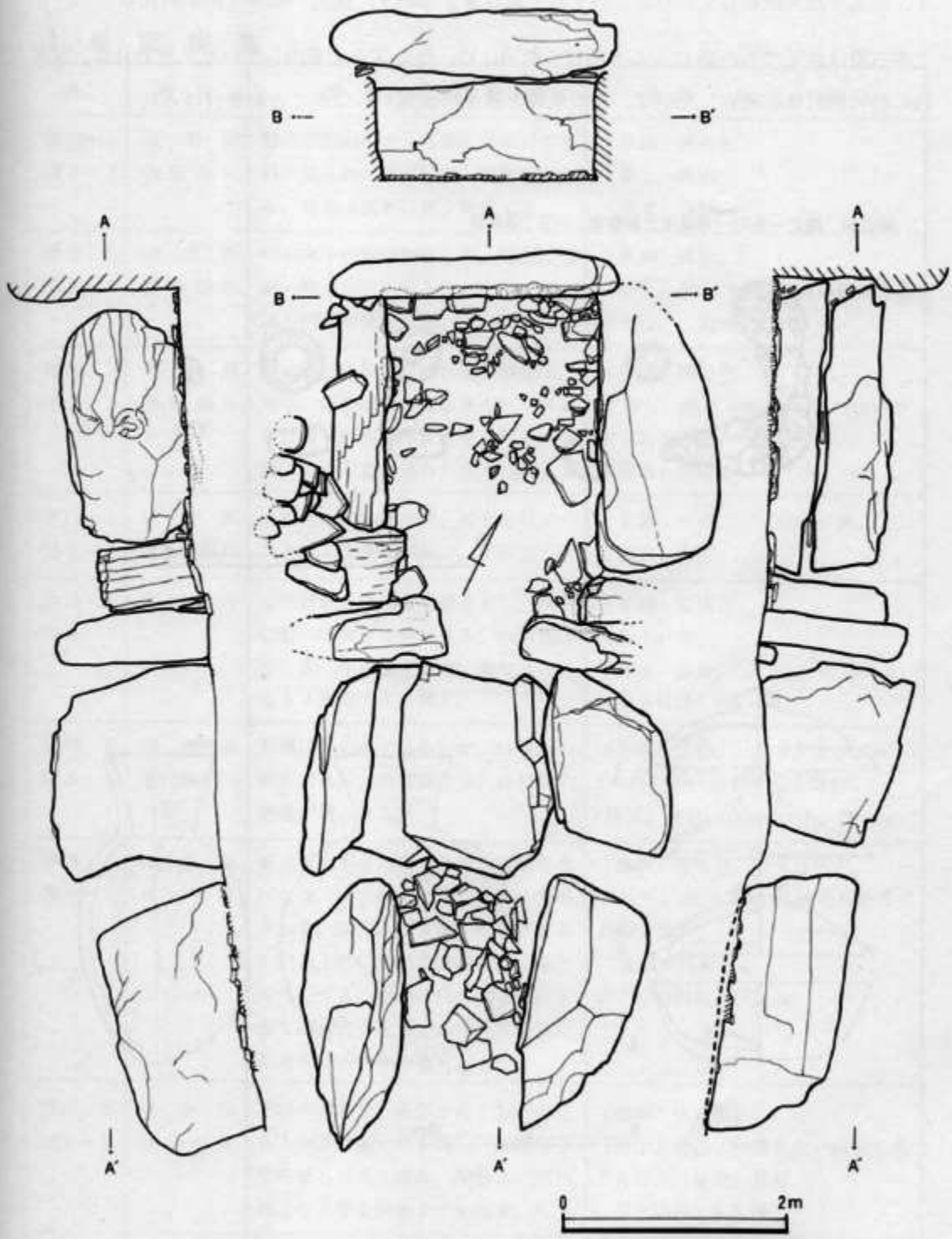
挿図11　西之一色一号墳実測図(字ヒタケ洞地内)





挿図12　西之一色一号墳断面図

挿図13　西之一色一号墳実測図(字ヒタケ洞地内)



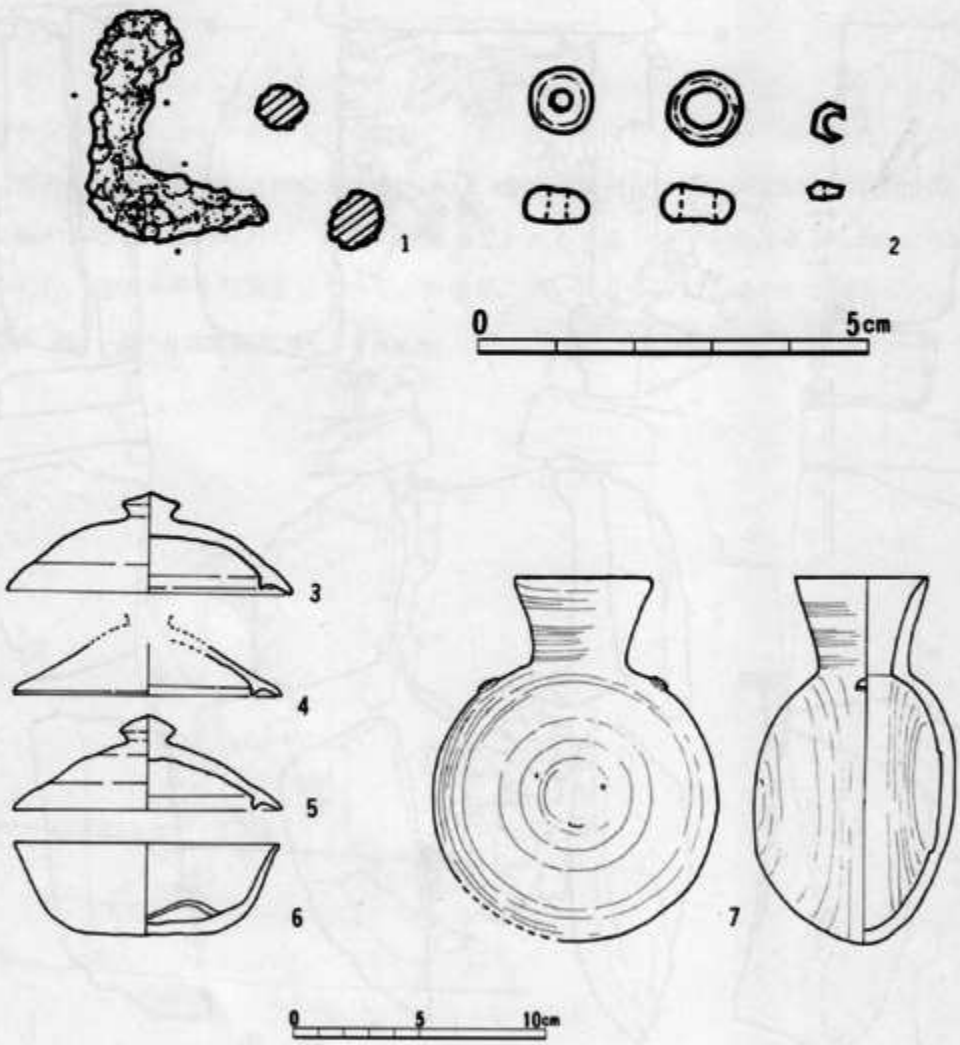
3．遺　物

清掃作業に伴って石室内からはいずれも破片であるが，提瓶1，坏蓋3，坏身1と不明鉄製品1，小玉3点が散在していたが，いずれも原位置を留めず，攪乱の跡がうかがわれる。

本古墳は地元の人の話によると昭和の初期には，既に床面が露出していたと言われる。玄室内に松の枯れ株が残存していて，その年輪と自生の状態からこのことが裏付けられる。

（住）

挿図14　西之一色町一号墳出土鉄製品，小玉，須恵器



第5節　須恵器一覧表

1．表面採集

No.	器種	器形の特徴	色調　胎土　焼成
挿19－1 図9－1	須恵器 甕胴部片	甕の胴部破片で，外面には平行叩き目が見られ，内面は削られ無文となる。外面は僅かに釉が附着する。	（色調）灰白色。 （胎土）緻密。 （焼成）良好。
挿19－2 図9－1	須恵器 甕胴部片	やや薄手の甕の胴部片で，外面には細い格子目状の叩き目，内面には，同心円文が見られる。	（色調）灰色。 （胎土）密。0.3mm程の白い砂粒を若干含む。（焼成）良好。
挿19－3 図9－1	須恵器 甕胴部片	甕の胴部破片と思われる。調整は，外面に僅かに叩き目が見られ，内面には僅かに同心円文が見られる。外面に釉の附着が見られる。	（色調）灰白色。 （胎土）密。0.2mm～2mm角の白い砂粒を若干含む。 （焼成）良好。
挿19－4 図9－1	須恵器 坏身底部片	小片のため詳細不明。外面底部はヘラオコシの後未調整で，不安定。	（色調）灰白。　（胎土）密。 （焼成）良好。
挿19－5 図9－1	甕口縁片	やや斜めに伸びる頸部を有し，端部に於いて大きく外反する。口唇部は少し広い平担面をなす。調整は内外とも丁寧なナデを施す。	（色調）暗灰色。 （胎土）密。 （焼成）良好。 （復元口径）18.5 cm
挿19－6 図9－1	須恵器 壺口縁片(?)	器種は明らかではないが，口縁部の破片である。内外面とも，自然釉の附着が見られる。	（色調）灰色。（胎土）密。0.5mm～1mm角の白い砂粒を若干含む。 （焼成）良好。（復元口径）11.8cm
挿19－7 図9－2	須恵器 坏身	高台を有する坏身で，高台は貼り付けた後，ナデ調整を施し底部に密着させる。立ち上がりは，やや稜を有し斜め上方にのび，口縁端部で僅かに外反する。調整は内外面とも，丁寧な回転ナデを施し，内外面底部に不定方向のナデを施す。	（色調）暗灰色。断面は灰色。 （胎土）密。0.2mm～3mmの石英質の砂粒を含む。 （焼成）良好。 ロクロの回転方向は左。
挿19－8 図9－3	須恵器 坏身	平底の坏身で，底部から上方への立ち上がりは鈍い稜を有し，端部はやや外反して丸く終る。調整は，内外面とも丁寧な回転ナデを施す。	（色調）灰白色。 （胎土）密。0.5mm程の白い砂粒を若干含む。（焼成）良好。 （復元口径）9.5 cm
挿19－9	須恵器	甕の肩部の破片である。外面に格子	（色調）外面は淡灰色。断面・内面

図9－1	大甕肩部	目状の叩き目が見られるが，上半部は擦り消している。内面には同心円文が見られる。	は灰白色。（胎土）密。1㎜角の白い砂粒を若干含む。（焼成）良好。（器厚平均）1.1cm
挿19－10 図9－1	須恵器 甕胴部片	甕の胴部片と思われる。外面には，細い平行叩き目が見られるが，内面は無文である。外面に釉が附着する。	（色調）外面は黒灰色。断面，内面は灰白色。（胎土）密。1㎜角の白い砂粒を含む。 （焼成）良好。

2．A₁ 地点出土

No.	器種	器形の特徴	色調　胎土　焼成
挿19－11 図9－1	須恵器 坏蓋片	坏蓋口縁部の小破片と思われるが詳細は不明。	（色調）乳灰色。（胎土）緻密。 （焼成）良好。
挿19－12 図9－1	須恵器 坏蓋端部片 （椽？）	坏蓋の破片と思われるが，小破片のため詳細不明。椽（たるき）口縁部の可能性もある。	（色調）外面は黒灰色。内面は灰白色。（胎土）密。 （焼成）良好。
挿19－13 図9－1	須恵器 坏身片	かえりを有する坏身の破片であるが小破片のため，詳細は不明。	（色調）外両，断面は灰白色。内面は灰色。（胎土）密。（焼成）良好。
挿19－14 図9－1	須恵器 甕胴部片	甕胴部の破片と思われるが，詳細は不明。調整は外面に細い格子目状の叩き目，内面に同心円文が見られる。	（色調）外面は暗灰色。内面，断面は灰色。 （胎土）密。（焼成）良好。
挿19－15 図9－1	須恵器 甕胴部片	甕胴部の破片と思われるが，詳細は不明。調整は細い格子目状の叩き目，内面は同心円文が見られる。	（色調）灰白色。 （胎土）密。1㎜角の白い砂粒を若干含む。（焼成）良好。

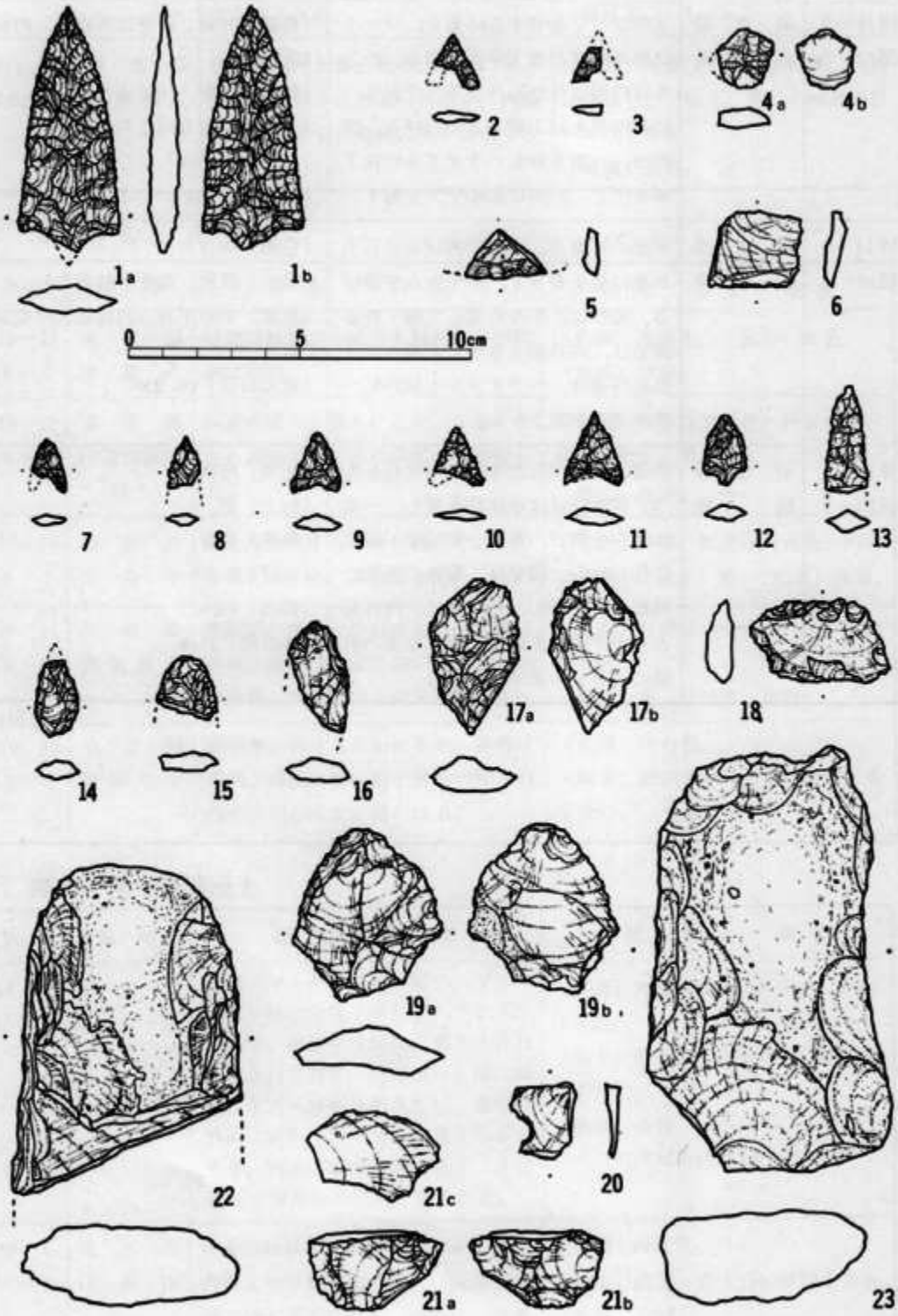
3．西之一色一号墳出土

No.	器種	器形の特徴	色調　胎土　焼成
挿14－3 図10－1	須恵器 坏蓋	宝珠ツマミを有する坏蓋で，ツマミは取り付けた後下半部にヘラケズリを施す。かえりは坏部内部よりひねり出されており，口縁端部を結ぶ線より下方へは張り出さない。調整は外面に回転ヘラケズリの後丁寧なナデを，内面に回転ナデを施す。また外面に自然釉の附着が見られる。	（色調）外面・断面は灰白色。内面は灰色。 （胎土）緻密。1㎜角の白い砂粒を若干含む。 （焼成）良好。 ロクロの回転方向は右。
挿14－4 図10－2	須恵器 坏蓋片	坏蓋口縁部の破片である。かえりは内部よりひねり出され，口縁端部を結ぶ線上までのびる。調整は，外面	（色調）暗灰色。 （胎土）緻密。若干白い砂粒を含む。 （焼成）良好。

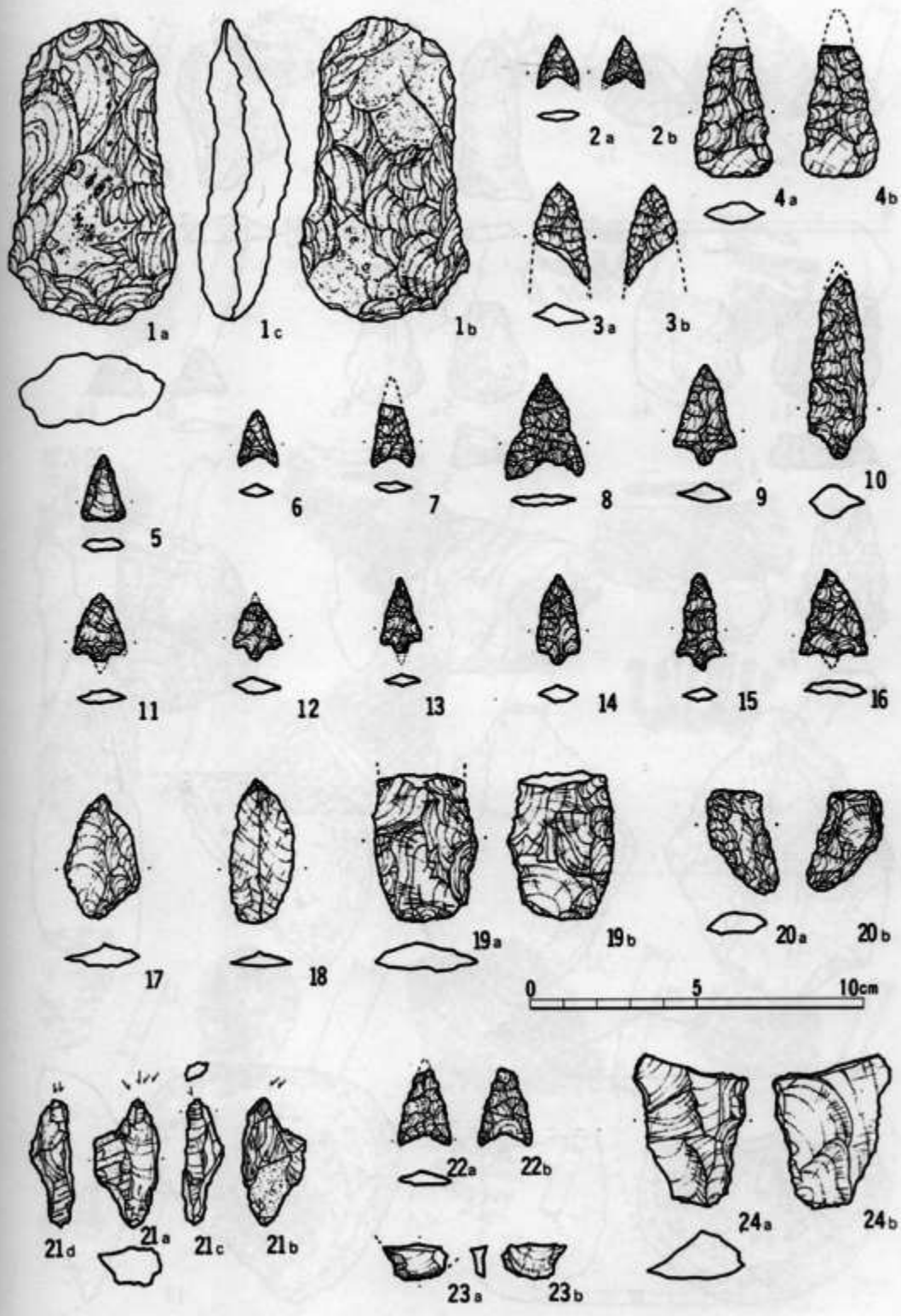
		に回転ヘラケズリのあと，ナデを施し，内面には回転ナデを施す。	（復元口径）10.5cm
挿14－5 図10－3	須恵器 坏蓋	宝珠ツマミを有する坏蓋で，ツマミは貼り付けた後下半部を削る。かえりは内面よりひねり出されており，口縁端部を結ぶ線上までのびる。調整は，外面を回転ヘラケズリの後丁寧なナデ，内面は回転ナデを施す。	（色調）外面，断面は灰白色。内面は灰色。 （胎土）緻密。（焼成）良好。 ロクロの回転方向は右。 （口径）10.6cm （器高）3.7cm
挿14－6 図10－4	須恵器 坏身	平底の坏身で，斜めにのびる立ち上がりは稜を有さず，やや丸みを帯びる。端部は，やや外反して細く終る調整は，内外面ともナデが施され，底部外面は，ヘラオコシの後回転ヘラケズリが施される。	（色調）灰白色。 （胎土）緻密。若干砂粒を含む。 （焼成）やや不良。内面底部に焼ぶくれ。 （復元口径）10.2cm
挿14－7 図10－5	須恵器 提瓶	肩部に形骸化した半球形の突起をもつ。器体はほぼ球体状を呈し，一面は丸みを帯び，他の一面はやゝ扁平に作られる。調整は，器体の外面に回転ナデを施し，口縁部は，内外面ともナデ調整を施す。扁平な面の肩部に「メ」の窯印を有する。	（色調）暗灰色。 （胎土）密。 （焼成）良好。 （口径）5.2cm （器高）14cm （体部径）11cm

（徳田）

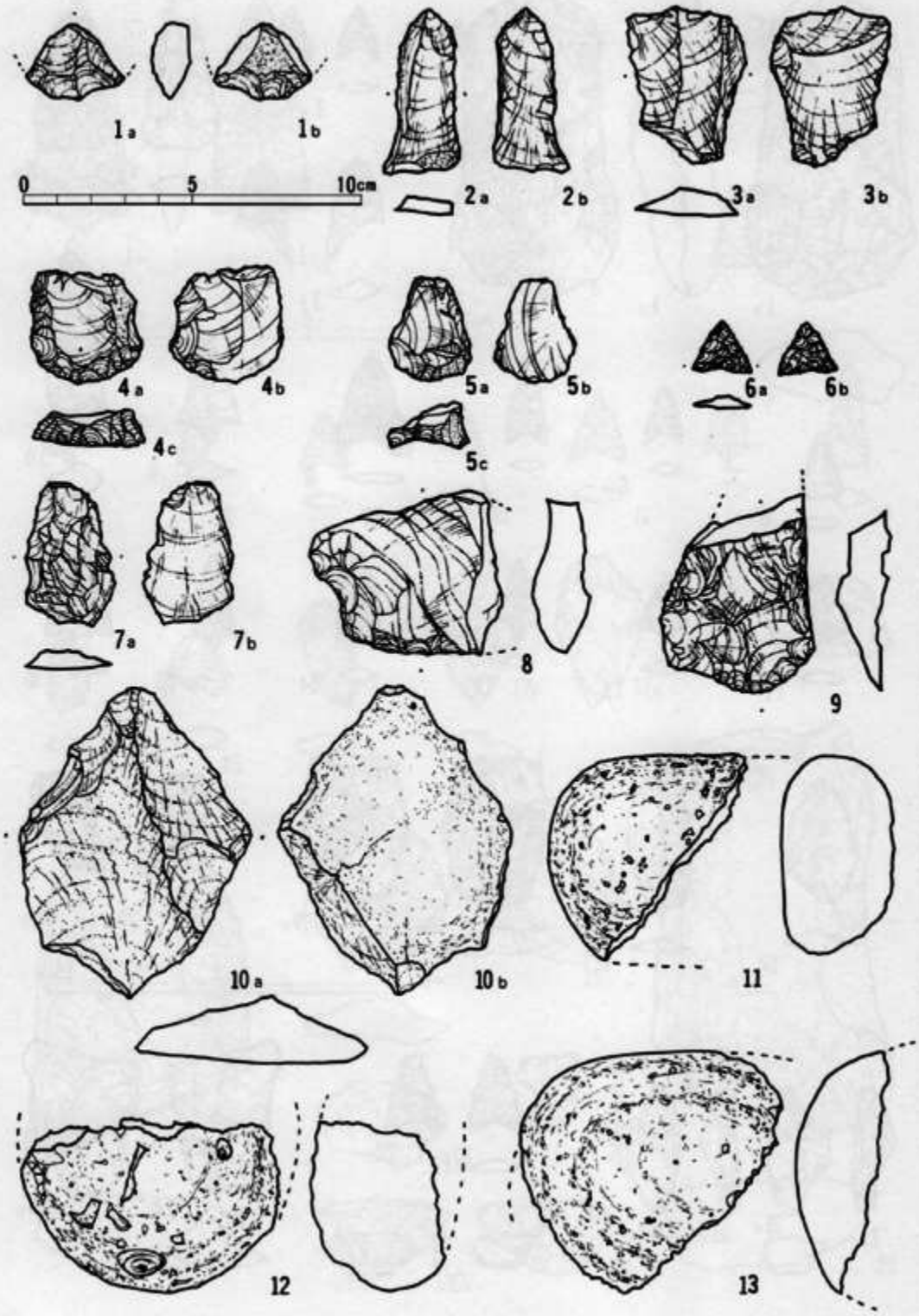
挿図15　表面採集遺物（石器）



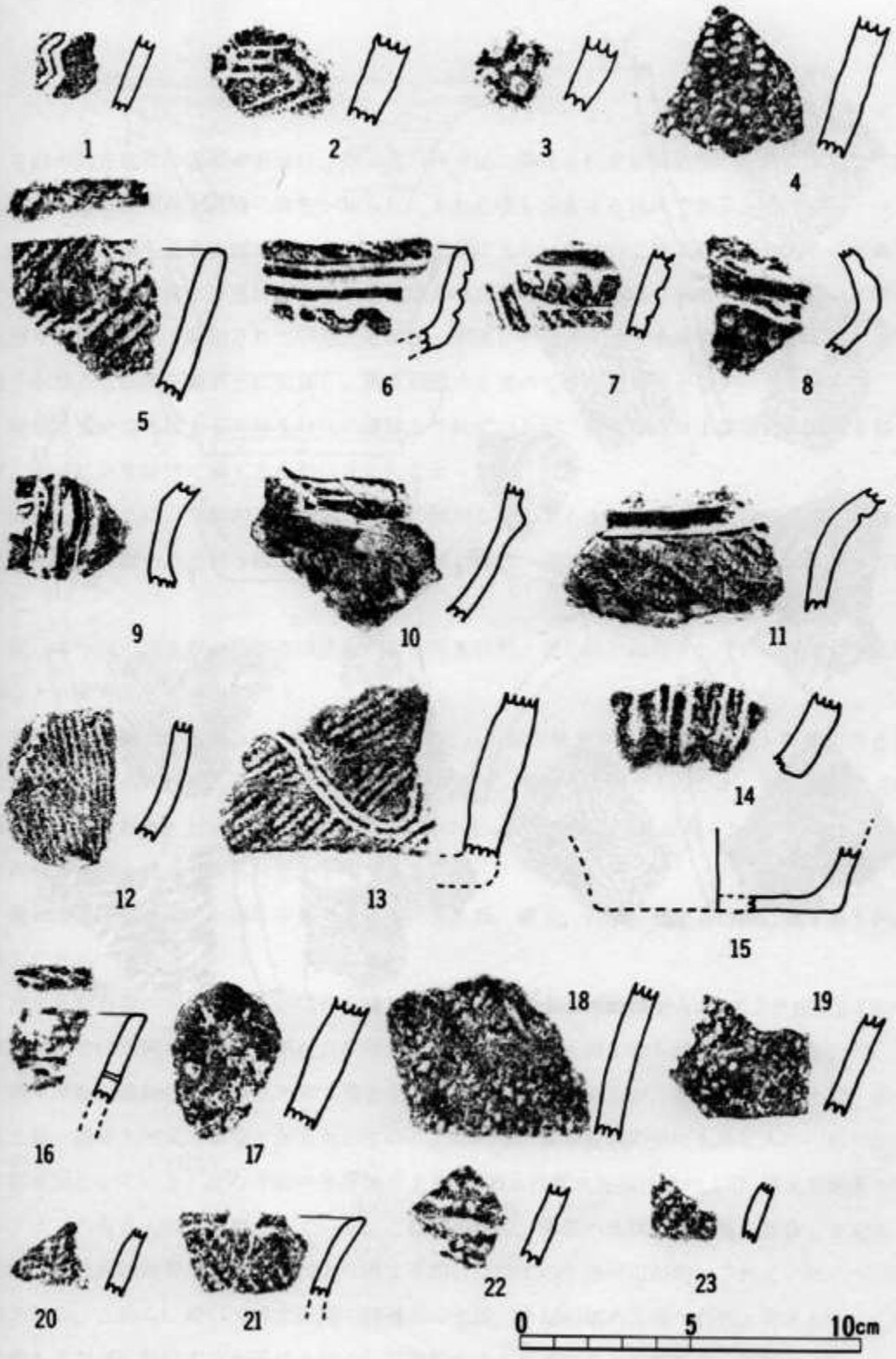
挿図16　表面採集遺物（石器）1～20
　　発掘による遺物（石器）21～24



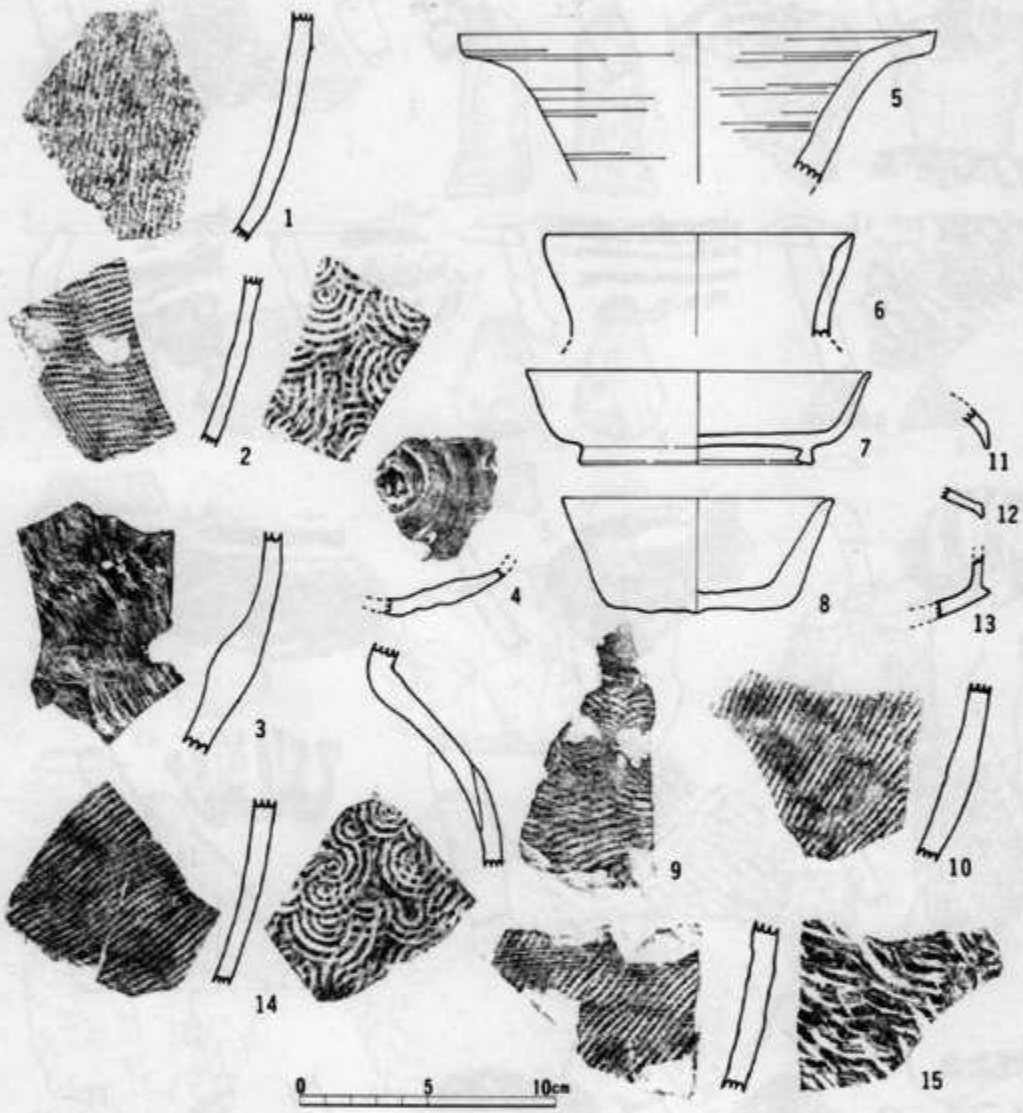
挿図17　発掘による遺物（石器）



挿図18 縄 文 土 器



挿図19　歴史時代の遺物(須恵器)表面採集 1 ～10，A₁地点出土遺物11～15



総　　括

今回の調査地点の善応寺遺跡は，高山市の西南部に開ける松倉丘陵地帯の一角に立地している。本丘陵には点々と遺物の散布が知られ，また古墳も分布する地域である。

この丘陵地帯も近来の開発による土地造成工事により，遺跡の立地する地形も大きく変貌している。また現在善応寺遺跡の立地する地域の巨石群の存在する地点を含めて，昭和の初期には廻り洞遺跡として周知されていた。(註1) その後，字名に合わせて遺跡名が変わっている。本来，廻り洞地点とは同一地形上に位置し，廻り洞地点を含めて善応寺遺跡となすべきである。

岐阜県遺跡台帳によると弥生時代の遺跡とされているが，調査地点および周辺の表採資料では，明確に弥生時代に属する資料は見られなかった。

前述したように，地形の一部変容，丘陵の傾斜などによる土砂の流出，遺物の移動も考えられる上に道路敷のみと言う限定された調査区域のため，遺跡の性格を把握することは困難であった。

従って今回の調査期中に調査隣接地の表面採集資料，また既に報告されている近隣の出土資料などを参考にして考察を行う。

先ず調査の結果，遺構は，A_2地点においてピット群が検出された。このピット群は画然とした規格性は認められず，その上時期を決定する遺物，層序も不明であったが，何らかの掘立柱遺構と推定される。ピット群の中でP_1は底面に近い部分に炭の混入が見られた。このピットがどの様な目的を持って掘られたか不明である。

遺物は，先章に述べた様に少量であるが，先土器，縄文，古墳，歴史各時期に属するものが出土したのである。

出土した石器の中で最も古い様相を持つ，黒曜石製の多面体彫器がA_2地点より出土している飛騨地方では類例が少なく高根村日和田の池の原遺跡に出土例が知られるのみである。

縄文早期の遺物は，B_1地点の第2層よりいずれも小破片であるが，格子目押型文土器，撚糸文土器，繊維入無文土器などが出土している。この他に表採資料の中にも黒鉛入の山形押型文土器が出土している。(註2) また今回の発掘地点より約200m程離れた隣接地域より，縄文草創期の柳又タイプの有舌尖頭器が出土している。(註3) これ等の周辺，隣接の地域の遺物等を綜合して考察すると，この丘陵地帯は先土器時代より縄文早期にかけての土地利用が開始されていたことが推察される。これらに続いて縄文前期の諸磯系の土器，中期初頭の五領ケ台式土器あるいは北陸系のものなどに類似する小破片を始め，石器類が出土している。石器類中，石鏃の中には後・

晩期に属するものが見られる。

今回の調査では，上記の時期に伴う明確な遺構を検出することが出来なかったが，遺物の散布よりして本丘陵地にかかる時期の遺構の存在する可能性が推察される。

古墳時代より歴史時代にかけての遺物は少量出土した以外は周辺の表採資料である。須恵器は壺，甕類の破片が主である。器形の知られるもの坏類が2点知られる。これ等はいずれも使用による磨耗が観察される。また小破片であるが有蓋坏の蓋部と身部が知られる。須恵器の時期は7世紀後葉より8世紀代のものである。

これ等の外に近世陶磁器の小破片が数点と寛永通寶，鉄片，ガラス片と石英質の石の表面が溶融したものが1点出土している。この溶融物に対して種々の見解があるが，(註4) ここでは資料の紹介に留めて置く。

今回の調査区域の附近に，第3章4節で記述した様な横穴式古墳が知られる。これは実測図作成調査が実施され，それによると両袖を有する横穴式石室を持つ後期古墳である。この古墳は，付近に知られる岩屋前古墳などと共に，今後この地方の後期古墳の特徴を知る上で良き資料となろう。

この様な成果を挙げて，今回の調査を終了したのである。

註1　福田夕咲「『廻り洞』丘上の巨石群」飛騨考古学会会報二号　昭和8年

註2　大野政雄 佐藤達夫「岐阜県沢遺跡調査予報」考古学雑誌五三の二　昭和42年

註3　有舌尖頭器は高山市では，ひじ山遺跡を始めとして，現在13本の出土が知られる。

註4　溶融物について窯の存在を推考する見方などがあるが窯体，またそれに関するものとは見受けられない。

1．善応寺遺跡全景

2．クワ入式A_1地点

3．A_2，A_3地点発掘前現況

4．B_1，B_3地点全景

5．B_2地点

1．A_2 地点発掘作業状況

2．B_1 地点発掘作業状況

3．A_2 地点掘立柱遺構全景

4．B_1 地点トレンチ

5．A_2 地点掘立柱遺構（南から）

6．A_2 地点掘立柱遺構（北から）

1．西之一色一号墳全景

2．正　面

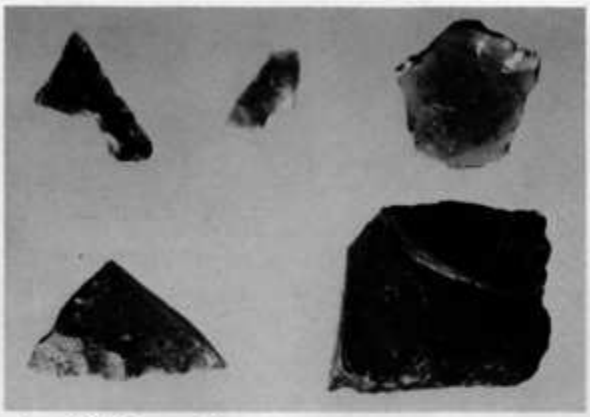
3．奥　壁

4．左側壁

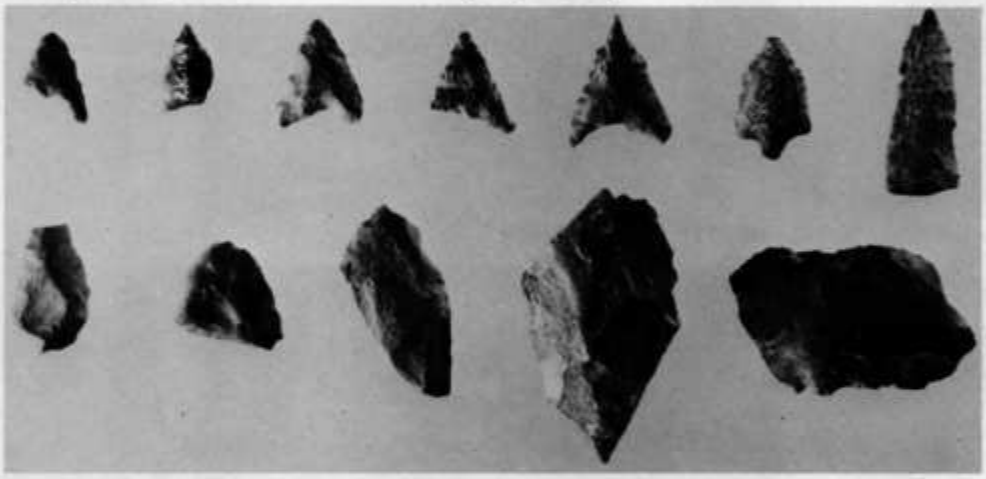
5．右側壁

6．袖　石

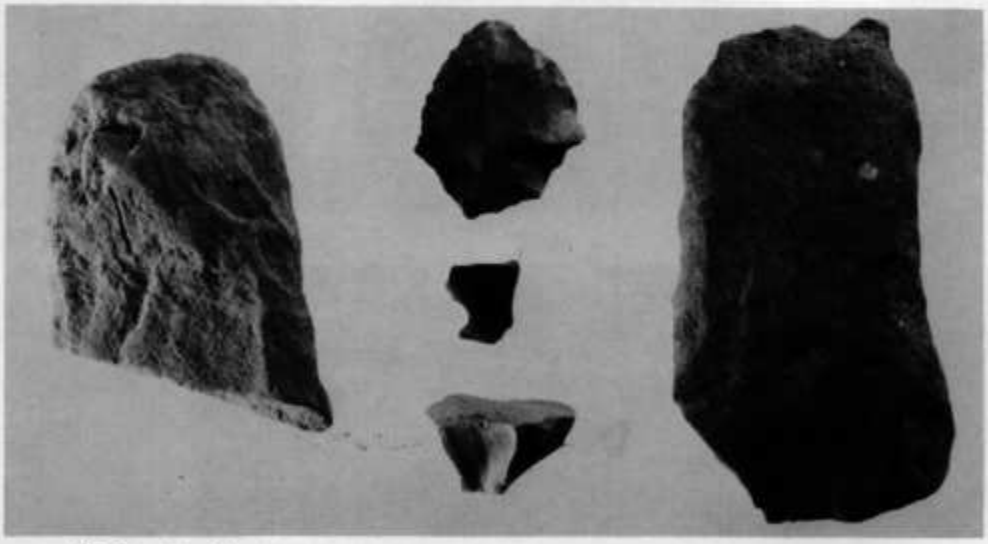
1．(挿図15－1)



2．(挿図15－2～6)



3．(挿図15－7～18)



4．(挿図15－19～23)

図 版 7　表面採集遺物(1～3)発掘による遺物(4.5)

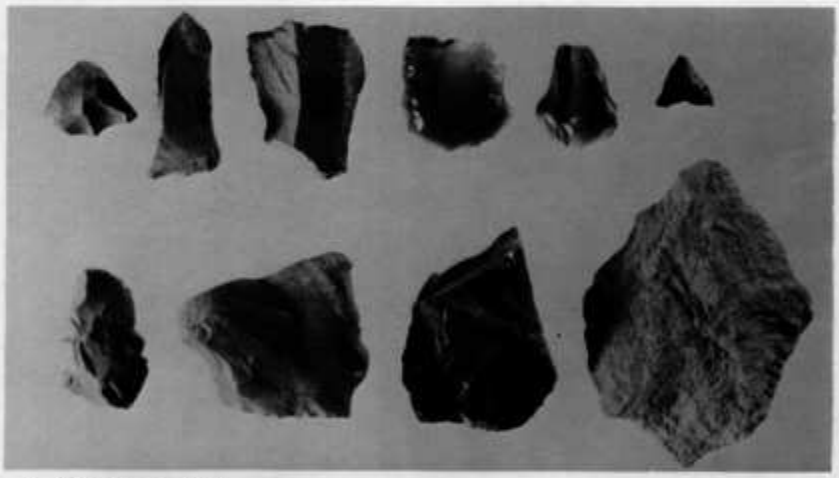
1．(挿図16－1～4)

2．(挿図16－19. 20. 22～24)

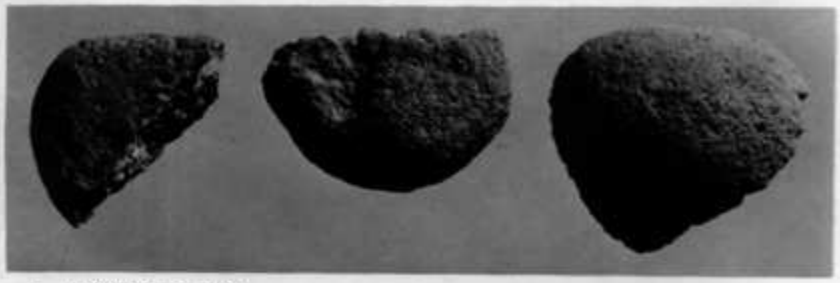
3．(挿図16－21)

(挿図16－21)

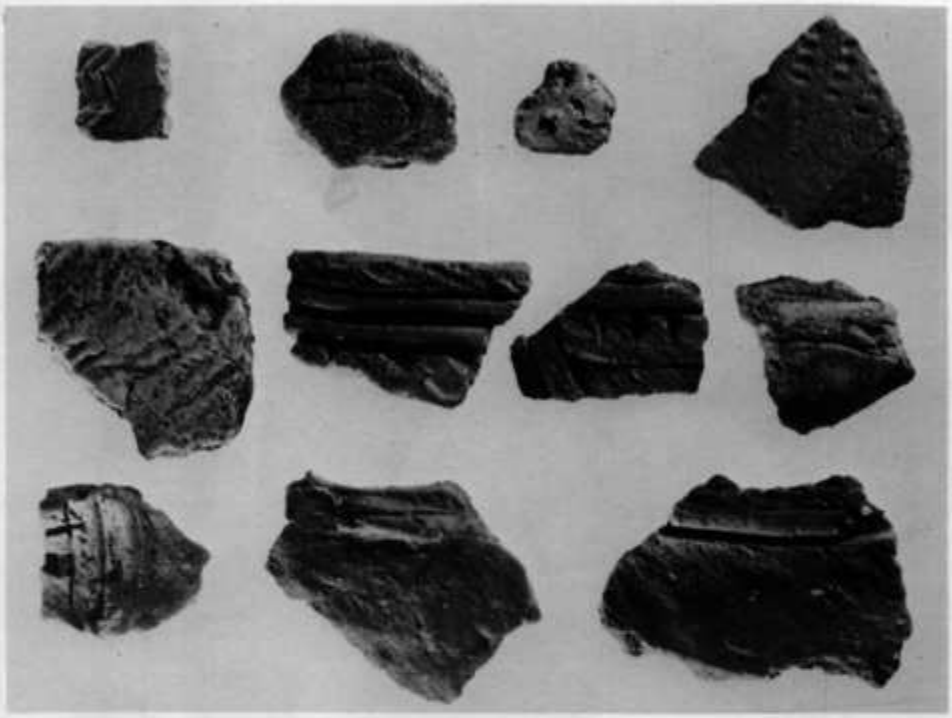
(挿図16－21)



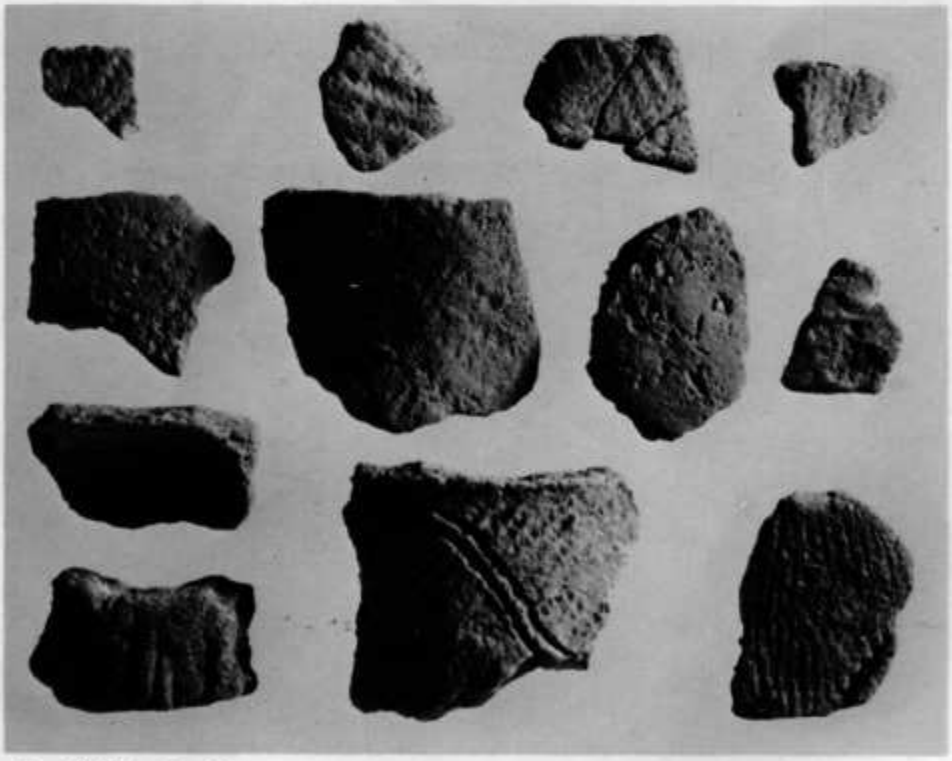
4．(挿図17－1～10)



5．(挿図17－11～13)

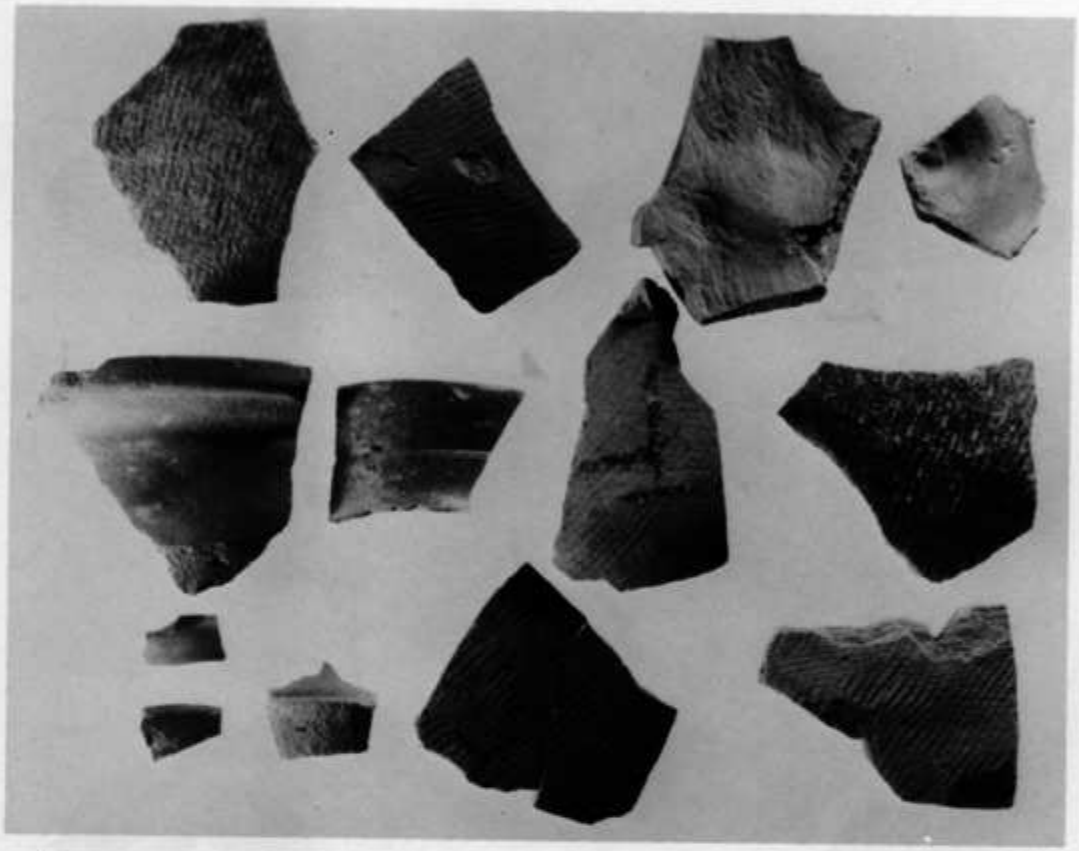


1．（挿図18－1～11）



2．（挿図18－12～23）

図版 9　歴史時代の遺物(挿図19) 表面採集，出土遺物



1.

2.

3.

4. 鉄　銭

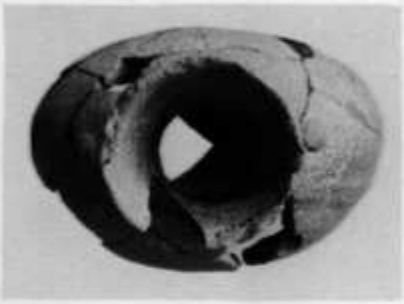
図版 10　西之一色一号墳出土遺物（挿図14）

1.

3.

2.

4.



5.

善応寺遺跡発掘調査報告書

昭和59年3月　発行

編集　高山市教育委員会
発行　高山市教育委員会
印刷　大　進　社
高山市有楽町40番地